

「両手を合せて一生懸命に頼み込む。玄眞は心の中で「ハ、ア、バカな奴だな、此奴、本者だと思つてゐるらしい、腰が抜けたらあらばモウ大丈夫だ、ソロ／＼還元してやろうかな……」と臺の上からホイと飛びおり、

玄眞坊「コーリヤ、木葉役人共、神變不思議の俺の魔力には驚いたぞろ、俺は泥坊の張本玄眞坊様だぞ。こゝな石佛は此通り、俺の小指一本で押倒し、其跡へ俺が立てつて居つたのだ。腰が抜けたとありや、何うすることも出来まい。汝も少々位は金を持つておろう。有金残らずこちらへよこせ……ナニ、ないぞ申すか、腰にブラ下けてゐるのは、そら何だ」

甲「ヤ、コリヤ辨當の残りで御座いますよ」

玄眞坊「ヨーシ、分つてる、俺も腹の空つた所だ。假令汝の食ひさしにしろ、命には

かへられぬ、此方へよこせ」

と云ひ乍ら、無理無体にひきむしり、一人の辨當を平けて了ひ、又次の奴の腰の辨當をむしつて一粒も残らぬ所迄、いち汚く食ひ了り、辨當箱は小口から舌の川で洗つて了つた。

甲「モシ玄眞さん、お前さんは大變な神力のある方だな、到底吾々の手には合ひませぬワ。お前さんの面を見てさへ此通り腰が抜けて了ふんだもの」

玄眞坊「ワツハ、こゝの御神力には随分驚いただろ、汝は一体何といふ奴だ」

甲「私なんか名のあるやうな氣の利いた者ぢや御座いませぬ。然し乍ら親が附けてくれたか人が附けてくれたか知りませぬが、私はトンビに申します。モ一人の男はカラスに申します」

玄真坊「成程、トンビにカラス、此奴ア面白い、そんなら俺も二人の家來が途ではぐれて了つたんだから、お前等二人を家來にしてやろう。さうだ改心致して追手の役はやめるか」

トンビ「へーへ、やめます共、何程追手よりもお前さんの乾兒になつての方が氣が利いてるか知れませぬワ。のうカラス、汝もさうだろう」

カラス「お前の意見通だ、モシ、玄真さんごやら、さうか宜しうお願ひ申ます」

玄真坊「ヨーシ、分つた。そんなら之から俺のいふ通するんだよ。何でも命令に服従するんだぞ。サア、行かう」

トンビ「モーシモシ玄真さま、行かうと仰有つても腰が立ちませぬがな。さうか貴方の神力でお直し下さる譯には参りませぬか」

玄真坊「エー、仕方がない、直してやろ、其代り此腰が直つたら最後、俺の神力は認めらるだろうな」

トンビ「へーへ、認める所の段ぢやありませぬ、已に／＼腰を抜かした時から、お前さんの神力を認めて御家來にして下さいと願つてゐるんですもの」

玄真坊「ツーン成程、さうに間違なからう」

と云ひ乍ら、兩人の腰の邊りをメツタ矢先に握拳を固めて擲りつけた。二人は餘りの痛さに思はず知らず立上り、一間許り逃出し、又もやバタリと倒れて了つた。

玄真坊「ハツハ、腰抜野郎だな、此様な者を何萬人連れてゐたつて、手足纏ひになる許りだ。又腰が直つたらついて来い、キツト家來にしてやらう。俺は天下經綸の事業が忙しいから御免を蒙らう、ても借も憐な代物だなア」

と腮を三つ四つしやくり、阪路を元氣よく鼻唄歌ひ乍ら登り行く。

之より玄真坊は彼方此方に、晝は山野に寝ね夜は泥坊を縁いで、百日餘りを過した。

又もやダリヤ姫の事を思ひ出し、會ひたくて堪らず、何にかして甘く彼女を手に入れた
 いものだに、少々懐が温くなつたので、タラハン城市へ變装して忍び込み、タラハン
 市中でも一等旅館と聞えたる丸太ホテルに泊り込んで了つた。玄真坊は奥の二間造りの
 別室に居を構へ、種々ミタラハン城轉覆の夢を辿つてゐる。そこへ下女が茶を汲んで出
 來り

下女「モシお客様、主人から、ネームを承はつて來いと仰せられました。さうか此

宿帳にお記し下さいませ」

玄真坊「あ、よし／＼」

と云ひ乍ら、スラ／＼と宿帳に記した。宿帳の面にはバリヨン書き記し、

玄真坊「俺はな、ハルナの都から遙々大黒主さまの命令に仍つて、諸國視察の爲行脚

に出て來てゐる者だが、最早七千餘國は遍歴済となり、當家に於てゆる／＼と二三
 ケ月許り休息さして貰ふ積りだから、主人に宜しく云ふてくれ。そして宿賃には決
 して心配かけないから、朝夕の膳部にはな、氣をつけるように頼んでおく」

といひ乍ら、宿帳を二三枚繰返してみると、二三日前から、コブライ、コオロが泊つて
 ゐるを見えて、自筆の姓名が記してある。玄真坊は何食はぬ面して下女に向ひ、

玄真坊「こ、にコブライとか、コオロとかいふ客は泊つて居ないかのう」

女下「ハイ、泊つて居られましたが、昨日の日の暮に、一寸そこ迄見物に出ると仰有つ
 たきり、まだお歸りになりませぬので、心配をしてゐる所で御座います」

玄真坊「あ、そうか、フーン」

下女「何か貴方、此方に御關係が御座いますのですか」

玄真坊「ナーニ別に關係も何もない、見ず知らずの人だが餘り面白い名だから、一寸尋ねてみたのだ。ヨ、之は俺の心付だ」

と云ひ乍ら懐から鳥目を取り出し、下女に投げ與へた。下女は喜んで押し戴き、母家の方へ歸つて行く。後に玄真坊は腕を組み吐息をつき乍ら、

玄真坊「アア、世間と云ふものは廣いやうでも狭いな。三月以前に追手にかゝり、彼等兩人にはぐれて了ひ、何處へ行つたかと思ふてをれば、而も同じ宿に泊つてゐたとは實に不思議だ。ア、察する所、彼等兩人は此俺がタラハン市へ大望遂行の爲に來てゐるに違ひない目星をつけ、彼方此方と行方を捜してゐるのだらう。何れ

今日明日の内には歸つて來るだらうから、様子も分らうし、マア緩り休養せうかい」

と獨ごちつ、腕を枕にゴロンと横たはり、グウ／＼と雷の如うな鼾をかいて寝て了つた。少時するに又もや下女がやつて來て、

下女「モシ／＼お客さま、エー、貴方のお話になつて居つた面白い名の方が二人歸つてみました。御用がありますなら會ふて上げて下さいませ」

玄真坊は目をこすり乍ら
玄真坊「ナアニ、コブライ、コオロの兩人が歸つたといふのか」

下女「左様で御座います。二人のお客さまに、貴方の御面相から、お背格好をお話し申しましたら、お二人さんは、さうか其方に一目會ひたいものだと言つたのでお伺ひに參りました」

玄真坊「別にそんな野郎に會ふ必要もなし、見た事もない男だが、所望とあらば、俺も一人だから、退屈さましに會つてやろう、ソツと此方へ通してみてくれ、首實檢の上、言葉をかけてやるかやらんかが定るのだ」

下女「左様ならそう申上ます」

と云ひ乍ら別れて行く。少時するに二人はドヤ／＼と玄眞の居間にやつて來た。

コブライ「イヤ、親方、どうも久振りだつたな、一体何處をうろついとつたんだい、

され丈搜したか知れないワ、のうコオロ」

玄眞は右手を上げて空中にふり乍ら、

玄真坊「オイ小さい聲で云はないか、近うよれ／＼」

コブライ「ハイ」

と云ひ乍ら耳許に兩人共より添ふた。

玄真坊「さうだ、タラハン城の様子は……偵察したか」

コブライ「ハイ、大變なこつて御座いますよ。タニグク山の岩窟で吾々の親分になつて

居つた、あのシヤカンナさんが左守の司となり、娘のスパール姫は王妃殿下に成上り、立つ鳥も落す如うな勢で、城下の人氣と云つたら、素晴らしいものだ。今日の

シヤカンナは泥坊の親分でなく、最早一國の主權者も同様だ。玄眞僧都の目的は、

マア／＼／＼こ、百年や二百年は到底立ちますまいよ」

玄真坊「何と、人の出世といふものは分らんもんだの。ウン、そうか、あの爺、又元の

左守に還元しやがつたな。ヨシ、それを聞くに、俺もむかつて堪らぬ。何だシ

ヤカンナの爺が一國の棟梁とはチャンチャラ可笑しいワ。併し兩人、大分に稼いだ

らうな」

コブライ「稼いでみましたが、ヤツミの事で兩人が宿賃が拂へる位なものです。然し乍ら金の在所は澤山に見届けておきました。さうも大將の智慧を借りなくちや、吾々の手に合ひませぬワイ」

玄真坊「フン、そうか、それぢや今晚一つ、何處の寶庫を拐かしてみようかい」

それより三人は浴湯を使ひ夕食を了り、又もや一間に入つてコソ／＼と大望遂行の準備の相談をやつてゐた。

三人は愈左守司の屋敷へ忍び入り、しこたま金をふんだくらんと覆面頭巾の扮装で裏口からソツミ抜け出し、町裏の細路を傳ふて、左守の館をさして忍びゆく。折柄チャ／＼と半鐘の聲、瞬く内に炎々天を焦してタラハン市の目抜の場所と聞えた

る廣小路が焼け出した。殆んど森閑として山河草木居眠つてゐたやうな星月夜も俄に目を醒したやうに、あたりが騒がしくなつて、何處の家も彼處の家も火消装束でトビを擔いで飛び出し、危険で堪らず、三人は或家の軒下に身を忍び、又もやコソ／＼と相談を始め出した。

玄真坊「オイ今夜はダメかも知れぬぞ。これ丈何處の家も／＼一度に目を醒し、トビを擔いで飛び出してゐるやがるから、街道の混雜をいつたら大變なものだ。こんな晩に仕事をしなくても又明日の晩があるぢやないか」

コブライ「泥棒稼ぎには持つて來いの夜さですよ。何奴も此奴も火事の方に氣を奪られてるから、火事泥と云つて、何處彼處をなし火消に化けて飛び込むんですよ。彼泥棒はこんな時に限りますよ、のうコオロ」

コオロ「ウンそらそうだ、今一番現ナマを餘計持つてる奴、左守の司と云ふ事だ。何時も彼奴の家には衛兵が三四十人は居やうが、こんな時は餘程の大火事だから、皆火消に出てるやがるから家はがら空だ。サ、行かうぢやないか。ナ、千万兩の金をふんだくり、其次にや民衆を買収して、タラハン城の轉覆を企てるには格好の時期だ。玄真さん、こんな可い機會はありませぬよ。左守の屋敷はすつかりと査べておきましたから、私に案内さして下さい」

玄真坊「成程、お前の命令には従はねばならんのだつたな。ヤ、こんな命令なら服従する」と云ひ乍ら、自分の身に災難が罹ることは、神ならぬ身の知る由もなく、火事の騒ぎに紛れて左守の裏門より、ソツと三人共忍び込んで了つた。

(大正一五・一・三一 舊一四・二二・一八 於月光閣 松村眞澄録)

第一二章 泥

壁 (一八〇二)

亂麻の如く亂れたる

タラハン國の内政も

スダルマン太子の即位より

施政方針一變し

左守右守が朝夕に

治國安民國富を

培ひ養ひ民心を

得たれば茲に國內は

漸く塗炭の苦を逃れ

萬事萬端緒について

みろくの御世と稱へられ

下國民は一樣に

新王殿下を親の如

主人の如く師の如く

尊敬愛慕しながらも

長き春日は聞けて行く

泥 壁

一九五

山野の花は散り果て、
 新緑滴る野の光
 彼方此方に時鳥
 世の太平を諺ふ折り
 好事魔多しの世の警
 タラハン城市の目貫の場
 行く道さへも廣小路
 大厦高樓忽ちに
 火焰の舌に包まれて
 見る／＼内に倒壊し
 數十軒の豪商は
 將棋倒しとなりける
 この虚に乗じて玄眞坊
 コブライ、コオロの兩人と
 牒し合せて左守神
 シヤカンナ館に忍び入り
 金銀財寶を奪ひとり
 日頃の失望達せんぞ
 神ならぬ身の悲しさに
 我身に危難のかゝるをば

つゆ白煙くゞりつ、
 左守が館の裏門の
 くゞりを押開け忍び入る
 遠く市中を見渡せば
 折から輝く月光は
 火焰に包まれ墨の如
 光を失ひ慄ひるる
 その光景ぞ凄じき
 この機に乗じて三人は
 奥の間深く忍び入り
 寶庫の錠前捻ち切つて
 躍り込まんとする時しも
 衛兵共に見付けられ
 一網打盡に三人は
 高手や小手に縛られて
 本城内の牢獄へ
 投げ込まれたるぞ淺間しき。

玄眞坊外二人は火事の騒ぎを幸ひに左守の館へ忍び込み、寶庫を押破つてシヨタマ財

實を奪はんと働く折しも、物陰に隠れてゐた十數の衛兵に苦もなく取押へられ、タラハ
ン城内の營倉に護送されて一人々々獨房に投げ込まれて了つた。

火事は漸くにして鎮まり、四方より集まる義捐金や同情金によつて再び元の大商店を
經營するの運びが纏まり、復興氣分が漂ふて來たので、そろ／＼三人の泥棒を調べに取
りかゝつた。先づ第一に玄眞坊を引き出し、右守の神のアリナが調ふる事となつた。

アリナは嚴然として高座に控へてゐる。玄眞坊は後手に括られた儘白洲に引出され豪
然と椅子に腰打ちかけ、やゝ反り身となつて右守を睨みつけ、心の中で「この青二才奴
何を猪口才な、まだ口の邊りに乳がついてゐる。何程の事があらう」と口をへの字に結
んでアリナの訊問を待つてゐる。

アリナ「その方の姓名は何に申すか」

玄眞坊「、、、」

アリナ「その方の住所姓名を明かに申せ」

玄眞坊「拙者の現住所はタラハン城内の第一牢獄だ」

アリナ「姓名は何に云ふか」

玄眞坊「此方の姓名を聞いて何と致す。たつて名を名乗れならば云はん事も無い、我
名を聞いて驚くな。抑も吾こそは第一靈國の天人、天帝の化身、天來の救世主、天
眞坊様と云つて左守神のシャカンナが兄弟分だ。火事見舞の爲にシャカンナの館へ
乗り込み類焼の難を佈れ、寶庫の寶物を安全地帯へ運んでやらんと、取るものも取
敢ず錠を捻ぢ切らんとする折しも、譯も分らぬ木葉武者共横合より飛び出し、盲滅
法界に天來の救世主を科人扱をなし、斯様な所へ押込みよつたのだ。その方の如

き青二才には、假令右守神でも相手にはならない。不審があればシャカンナを呼んで来い、トツクリと天地の道理を説いて聞かせる程に、アーン……。こりや青二才俺の縛を解かんか、煙草を一服吞ませ。左守神の兄弟分を斯様に虐待致すものがあるものか、不心得千萬にも程がある。火事見舞の客か泥棒が分らぬ位の事でござうして一國の右守神が勤まると思ふか、チト確り致したがよからうぞ」

アリナ「然らばその方に尋ねるが、何故火事見舞に出て来るのに覆面頭巾で来たのか、何故兇器を持つて飛び込んで来たのか」

女真坊「ハッハ、、、扱もく分らぬ右守だな、空からは一面火の粉の雨、火事場へ出て働かうと思へば覆面頭巾は當然の事だ。かの消防隊を見よ、一人も残らず覆面頭巾の装束ぢやないか」

アリナ「然らば何故三尺の秋水を閃かして這入つたか、其の理由が分らぬぢやないか、てつきり泥棒が目的ぢやろう」

女真坊「アッハ、、、譯の分らぬにも程があるわい、俄火消の事にて齋もなし、纏もなし、止むを得ず丸太旅館の火事羽織を身につけ、武士の現たる刀を提げ萬一の警戒に備ふる爲だ。彼の左守の屋敷には數十人の衛兵が各武器を携帯し、三尺の秋水を抜いて警固厳しく控へてゐるぢやないか。火事の混雑によつて衛兵は七八分迄消防の應援に出掛け、左守の館は實に不安極まる無防備も同様、兄弟分の諂を以て二人の部下を引率れ應援に向つたのだ。かゝる親切なる吾々の行動に對し、青二才の分際として訊問するとは片腹痛いわい。汝如き木葉武者に話した所で譯が分らうまい、一刻も早く左守を此場へ呼んで来い、キット黑白が分るだらう」

アリナ「その方の伴ふてゐた兩人を調べて見れば何れも泥棒の目的で這入つたと申し立て、ゐるぢやないか。何程汝が小利口に抗辯するとも、已に／＼兩人の自白によつて強盜に忍び入つたのは明白の事實だ。假令左守神の兄弟分だといつても國法は枉ゆる譯には行かぬ、さうぢや兩人の自白を打消す勇氣があるか」

女真坊「アツハ、、、左様な愚問を發する奴があるか、斯様な事は、加減に片付けたがよからう。よく考へて見よ、コブライ、コロオの兩人は、もこよりシヤカンナ泥棒親分の輩下ぢやないか。タニグク山の岩窟に立籠り、民家を苦め財物を奪ひ取つた鬼畜生の片割だ。彼等二人は元よりシヤカンナ泥棒の輩下だから、人の家へ忍び込めば泥棒に入つたと早合點するのは見えすいた道理だ、吾は天來の救世主だ、天帝の化身だ。何を苦んで目臭れ金に目をくれ、左守の屋敷へ忍び込む道理があら

うぞ。目が見えぬにも程があるわい」

と何處までも押強く、流石の右守も困り果て、

アリナ「先づ今日の調べは、之で措いておく、又明日トツクリと調べるであらう」と云ひ乍ら白洲の奥へ姿をかくした。

女真坊は二人の小役人に引立てられ、もこの牢獄へ歸り行く。

女真坊は牢獄に打ち込まれ乍ら平氣の平左で鼻唄を歌つてゐる。

女真坊「樂焼見たやうな此方の顔に

惚れるダリヤさんは茶人さん………こ。

何程左守が威張つて見ても

もこを洗へば泥棒さん………か。

泥棒々々ど偉さうに云ふな

左守が泥棒の張本ぢやないか。

左守シヤカンナの泥棒でさへも

娘のおかけで世に光る……こ。

子供持つなら娘を持ちやれ

親も諸共玉の輿……こ。

タニグク谷間の泥棒さんも

今はタラハンの左守となつた。

左守々々ど偉相に云ふな

井戸の底にも居る蝶鱈。

右守か左守か俺や知らねども

井中の蝶鱈によく似てる。

井中の蝶鱈は大海知らぬ

さうして天帝の心が分らう」

かゝる所へ守衛が靴音高くやつて来て、

守衛「こりや／＼坊主、静にせんかい何を云つてゐるのだ」

玄真坊「守衛々々ど偉相にさらす

貴様は乞食の兄ぢやないか。

乞食番太に坊主に兵士

「まだも悪いのは下駄直し」

守衛 「こりや坊主、貴様は自分の事を云つてるぢやないか」

玄真坊 「俺は天帝の化身の身魂

頭は坊主に化けてゐる。

假令頭は坊さんぢやとて

俺の靈は天帝さんだ」

守衛 「エー、仕方ない坊主だな、静にしろ、右守さんに報告するぞ」

玄真坊 「オイ、守衛、左守、右守に俺がこつづけしたと云つてくれ、……俺が泥棒なら

貴様等もヤツバリ泥棒だ……と云つて居つた、之丈でいい、其の外の事は云ふな貴様の身の破滅になるといけんからのう」

守衛はプリンと體をふり、面をふくらし一言も答へず、靴の先で牢獄の戸を二つ三つ

蹴り乍ら足早やに何處へ行つて了つた。

玄真坊は退屈で堪らず獄中に縛られた儘俄作りの經文を讀出した。

「摩訶般若波羅密多心經」

無限無量絶對力の權威を具備する天帝の御化身、最高第一天國の天人並びに最奥靈國の天人、天來の救世主、天真坊様は不慮の災難によつて、今やタラハン城内の狹隘なる牢獄に日夜を送る身となりぬ。抑も人は萬物の靈長、天地の花、天人の住所なるにも拘らず極惡無道の泥棒が親分、左守神と化けすましたるシヤカンシが今日の暴狀、必ずや天地の神は怒らせ玉ひ、地震 雷 火の雨はまだ愚か、大海嘯の大襲來によつて左守右守は云ふに及ばず、大災害の突發せんは明瞭なり。あ、憐むべし盲滅法の世の中、天に日月輝く共中空に黒雲塞がりあれば天日も地に達せざる道

理也。あ、バラモン帝釋自在天大國彥命、一時も早く、天變地妖の奇瑞を示し、此城内を初めし全國の民衆に目をさまさせ玉へ。吾はもとより泥棒にも非ず、又左守右守が如き野心家にも非ず、只天が命するまゝに天意を行ふのみ、歸命頂禮謹請、再拜、南無バラモン天王自在天、吾願望を納受ましますせ」

かゝる所へ右守神は玄眞坊の様子如何にと只一人、偵察がてらやつて来たが此經文を聞いて吹き出し、

アリナ「オイ、天帝の化神殿、大變な雄猛びで御座るな、一時も早く天變地妖の奇瑞を見せて貰ひたいものだなア」

玄眞坊「ヤア、よい所へやつて来た、その方は右守のアリナぢやないか、さうだ、左守と相談して来たか」

右守「黙れ、罪人の分際にして何業詔を吐くのだ。何と云つても泥棒の目的で忍び込み乍ら、千言萬語を費しての辯解も、吾々の聰明を蔽ふ事は出来ないぞ。こゝ二三日の間の命だ、喰ひ度いものがあるなら何なりと云へ。今に刑場の露と消ゆる身の上だから、此世の名残に何なりと吐いておくがよからう。その方の罪は已に死罪と定つて居るのだ」

玄眞坊「ハッハ、、、その方が何程死罪ときめても神の方、此方さんから見れば無罪で御座いだ。兎も角左守が此處へようやつて來ん事を思へば、ヤツバリ俺が恐いのだ。そらそうだ、面の皮引むかれるのが嫌さに菟菟の幽霊のやうに慄ふてゐるのだらう。憐れな老骨だな、イツヒ、、、何程自身の娘が別嬪で、王妃殿下になつたと云つても、その父親たる自分が泥棒の親方では、到底一國の政治は行はれま

い。泥棒の親分になればキツト天下は取れると國民に國民教育の手本を見せるやうなものだ。そんな事でタラハンの國家が續くと思ふか。オイ右守、タラハン國の事を思へば、さう俺が云つた左守に云つてくれ。俺は已に覺悟はしてゐる、然し左守に一度會はねばならぬ。死罪なつと五罪なつと勝手にしたがよいわ。それ迄に是非とも左守に云つておく事がある。左守だつて此世の名残に會はぬと云ふ事もあるまい」

アリナ 「左様な世迷言は聞く耳は持たない。ま一度白洲で調べてやらう、適確な證據が上つてゐるのだから」

と云ひ乍ら靴音高く此場を去つた。玄真坊は又もや大きな口をあけ無恰好の目鼻を一緒によせ、やけ糞になつて都々逸をやり初めた。

玄真坊 「逃けたくよ又逃けた

玄真坊さんの御威光に恐れ

右守のアリナが尻に帆かけて スタコラヨイヤサ逃け失せた

扱ても憐れな代物だ 左守シヤカナはさぞ今頃は

吐息つくく机に向ひ 昔の疵を思ひ出し

頭痛鉢巻汗タラくく 藥鐘もらしてゐるだらう

ア、コラシヨくく 家を建てるのは大工さん

壁を塗るのはシヤカナだ 昔の古疵ゴテくくく

泥塗り隠すシヤカナさん 娘の光でピカくくく

螢のやうな光出す 自分は泥棒して人苦めて

俺を泥棒に苦める 泥棒するならしつかりやれよ

七千餘國の月の國

大黒主の領分を

片手に握つて立つやうな 僅かたらハン一國の

番頭さんでは氣が利かぬ 左守かいもりか知らねども

世間の狭い親爺さん ア、コラサ〜」

と、精神錯亂者のやうに喋り立てゝゐる。格子窓の間から遠慮會釋もなく蚊軍が襲撃する。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 北村晴光録)

第一三章 詰

腹 (一八〇二)

左守の神の館の離れ座敷には、戸障子を密閉して右守、左守が何事か秘々密談に耽つて居る。

右守「左守様、此間は廣小路の大火によりまして大變にお氣を揉ましましたが其後何のお變りもありませんか。あの混雜にまぎれ込み、賊がお館に忍び込みなご致しまして大變御心配で御座いませう」

左守「イヤ御親切に有難う御座る。ヤ、もう年は取り度ないものだ。かうして床の間の置物のやうに左守の神となつて居るが、心許り焦るのみでやくたいも無い事で御座る。谷蠟山の谷間に居つた時は何にかして再び元の左守となり、國政の改革をかう

もやつて見やう、あゝもやつて見やう三十年の間心臓を砕いてゐたが、實地に當る
とさうも甘く行かんものだ。自分の心では確りして居るやうに思ふが、何とはなし
に差確したと見えるわい」

右守 「左守様、何を仰言いますか、貴下の御名聲は大變な人氣で御座いますよ。この右
守も貴方の御威光によつて歪みながらも御用を勤めさして頂いて居りますが、行き
届かぬ事許りでさぞお目だるい事で御座いませう。國王殿下は未だ御若年でもあり
左守様に氣張つて貰はねば到底タラハン國は支へられますまい」

左守 「賢明なる國王殿下と云ひ、聰明なる其方と云ひ、タラハン國の柱石は最早やビク
とも致すまい。吾は老年、氣許り勝つて思ふやうに體が動かない、困つたものだ。
政務一切を其方に打ちまかして誠に濟まないと思ふが、若い時の辛勞は買ふてもせ

いと云ふからさうか一つ氣張つて下さい。自分は床の間の置物で居るのだ」

右守 「何を仰言います。青二才の吾々、何が出来ますものか、皆左守様のお指揮によつ
て、さうなりかうなり御用が勤まつて居るので御座いますから。時に左守様、廣小
路の大火災の夜お籠へ忍び込んだ泥棒について昨日取調べました處、大變な事を申
ますので取調を中止し牢獄につないでおきましたが、又しても左守様のお名を引き
合ひに出しますので倍臣の手前誠に困つて居ります。如何いたせば宜敷う御座いま
すか」

左守 「此左守を引き合に出す泥棒は一体何者で御座るかな」

右守 「何でも天來の救世主、天帝の化身、第一靈國の天人、天真坊だとか申して居りま
す。そして左守様は兄弟分だに主張しますので、一應伺ひました上取調をせうこ

思ひまして、態々お伺ひ致した次第で御座います」

左守は當惑さうな顔をしながら、

左守 「右守殿、大方それは發狂者で御座ろう。兎も角拙者が明日取調べて見ませう。どうか誰も来ないやうにして下さい」

右守 「ハイ畏りまして御座います。夫からもう二人の泥棒も天真坊と同様に左守殿の御名を引き合に出し、左守の親分に會せと主張致して居ります」

左守 「其二人の泥棒の名は何と云ひましたかな」

右守 「ハイ、一人はコブライと云ひ、一人はコオロと申て居ります」

左守 「ハテナ、谷嶮山の岩窟に……」
と云ひかけて假に言葉を切り

左守 「長らくの間拙者も谷嶮山の奥深く世を忍んで居つたものだから様子も分らず、又如何なるものが自分の顔を見知つて吾名を騙て居るかも知れませう。何は兎もあれ三人の泥棒を右守殿、そつと吾館へ呼んで来て下さいませうまいか、内々取調べたい事が御座るによつて……」

右守 「左守様の仰せにあらば、假令掟に背いても呼んで参りませう」

左守 「いや白洲で調べるのが規則であれど、この左守は知らるゝ通りの老体、到底足が續かないから、吾館で取調べて見たいと思ふのだ。左守は一國の宰相、吾家で調べやうと、白洲で調べやうと些つとも差支へはない筈だ。かゝる例は先王の時代から幾度もあつた事だから」

右守 「これはえらい失言を致しました。然らば明日はこれに引き立て、参りますから

篤りお調べを願ひます。左様なら」

と慇懃に挨拶を述べ己が館へ歸り行く。後に左守は脇息にもたれ、吐息をつきながら獨語。

左守

「ア、人間の行末位 果ないものはないなあ。臥薪嘗膽十年の艱苦を凌いでヤツと目的を達成し、元の左守となつて國政を改革し、新王殿下の政治の樞機に參與する身分となつたと思へば寸善尺魔の世の中、奸佞邪智に長けたる玄眞坊が泥棒となつて入り込み、右守に迄も吾古創を羅列して聞かしたのであろう。ア情ない。さうして今日の地位が保たれやうか、困つた事になつたものだ。自分は心より泥棒の親分となつては居なかつたが、タラハン國を思ふ餘り手段を選まなかつたのが吾身の不覺だ。そして今度の國政の改革について二百の部下は妨げにこそなれ、力になつた

奴は一人もない。あ、世の中は正義公道を踏まねば末の遂げられないものだなア」

左守は來し方行末の事なき思ひ浮べて其夜は一目も得眠らず夜を明して了つた。

鳥は嗚を放れて嬉しげに太平を歌ひ、雀はチュン／＼と愉快氣に軒に囀つて居る。左

守は之を眺めて又もや獨語

左守「あ、私は何故あの鳥に生れて來なかつたろう。自由自在に大空を何の憚る事もな

く前後左右に翱翔する様はまるで天人のやうだ。雀は無心の聲を放つて千代々々こ

ないてゐる。それにも拘らず、神の生宮と生れた人間の吾身、何故まアこれだけ苦

しみの深い事だろう」

と吐息を漏らして居る處へ、玄眞坊、コブライ、コオロの三人は獄吏に護られ大手を振

り乍ら裏門を潜つて左守の居間の庭先へやつて來た。左守は玄眞坊の姿を見るより

アツと許りに打ち驚き卒倒せんとしたが、吾と吾手に氣を取り直し、

左守「やア獄卒共御苦勞であつた。三人の者はこの左守が預かつておく。早く歸つて呉れ」

獄卒「ハイ」

と云ひ乍ら獄卒は逸早く此場を立ち去つた。傍に人なきを見済した女眞坊は遠慮會釋もなくツカ／＼と座敷に飛び上り、左守の前に胡坐をかき默然として左守の顔を睨めつけて居る。コブライ、コオロの兩人も女眞坊の左右に胡坐をかき、無雜作に控えて居る。

左守「ヤアお前は女眞坊ぢやないか、何處を迂路ついで居たのだ。そうしてダリヤ姫は手に入つたのか、其後の經過を話して呉れ」

女眞坊「ハ、、、ダリヤはさうでもよいがオイ兄貴、随分山カンが當つたもののだう。綺麗な娘を持つたおかげで、一國の宰相と迄なり上つたのだから、些つとはおごつて貰つても好かりさうなものだ。此間もタラハン市の火事と聞くより兄貴の家が險呑と思ひ、この兩人と共に救援に向つたところ、譯のわからぬ雜兵どもが泥棒と間違へ牢獄にぶち込みよつたのだ。お前も俺の危難を聞かんでも無かろうに、素知らぬ顔とはあまり虫がよすぎるぢやないか。そしてあの右守の青二才奴、俺に對して無禮の言をはざきよつた。さうだ兄貴、兄弟の誼で俺の云ふ事を聞いて呉れな

いか」

左守「一体さうせいと云ふのだ」

女眞坊「外でもない、あの右守を免職さしてその後釜にこの女眞坊を直すか、それも叶

はずば、兄貴が右守となり、俺を左守に推薦するか、二つに一つの頼みを聞いて貰ひてえのだ」

左守

「外の事なら何でも聞いてやるが、オーラ山で泥棒をやつて居つたお前を、左守の神に推薦する事は到底叶ふまい。殿下のお許しが無いに定つて居るからう」

玄真坊は大口あけて高笑ひ

玄真坊

「ハ、、、、オイ兄貴、そりや何をいふのだ。俺はオーラ山に於て三千人の泥棒の大親分だぞ、兄貴は僅かに二百人の小泥棒の親分ぢやないか、二百人の親分が左守になつて、三千人の大親分が左守になれないと云ふわけがあるか。それはチミ勝手な理窟ぢやないか」

左守は「ウン」と云つたきり、黙念として頸垂る。コブライは膝をにじりよせ

コブライ「もし親分、貴方は目的を達したらお前を重臣に使つてやらうと仰有つたな。

なアコオロお前だつてさうだろう。毎日々々日課のやうに聞かされて居つたのだからう。俺だつて泥棒をして居たい事はないが、何分親分の命令を忠實に守つてやつて来たのだから、親分が出世すりや俺達も出世するが當然ぢやないか」

コオロ「ウン、そりやその通りだ。もし親分、いや左守さんこの瘡つ節を買つて下さるでせうなア」

左守「そりや確にお前達にも其の約束はしておいた筈だ。併し今日ではその約束を實行出来ないのを遺憾とする。假令吾筋へ應援に来てくれたにもせよ、護衛兵の目を忍び裏門から忍び込み、寶庫の錠前を捻切らうとして居たのだから誰の目から見ても泥棒としか認められない。今日は最早お前方を罪人と認める。心易いは常の事、タ

ラハン國の掟は枉ゆる事は出来ない。三人共死罪に處すべきが掟なれ共、兄弟分や主従の誼で俺が見逃してやろう。サア一時も早く裏門から姿を隠したらよからう。此上タラハン城に迂路つけば再び捕縛せらるゝであらう、さうすりやもう俺の手には及ばない」

玄真坊「エ、仕方がない、今日はおこなく歸つてやらう、併し左守隨分金が溜つたらう、ちと土産に出来ないか、金なしには何所へ行くわけにも行かないからな」

左守「そんなら仕方がない、お前が忍び込もうとしたあの庫の中の有金をすつかりやるから、それを持つて早く姿を隠してくれ。後は私が何とか始末を付けて置くから」
玄真坊「ヤ、實の處はお察しの通り其金が欲しかつたのだ。道は兄貴だ」
コブライ「ヤア道は親方……金さへあれば名も位も何も要ぬぢやないか」

コオロ「親分有難う、そんなら遠慮なしに三人分配して歸ります」

これより三人は山吹色の小判をいこたま身につけ裏門より木の葉茂れる密林を縫ふて何處にもなく姿を隠した。後に左守は料紙を取りよせ、筆の跡も麗々しく國王、王妃兩殿下を初め右守に當てたる書置を残し、自分は白裳束になつて、三五の大神の祭りある神前にて腹掻き切り立派な最後を遂げた。

かゝる事とは夢露知らぬ右守の神は様子如何にも再び左守の館を訪ひ、案内もなく離棟の座敷に行つて見れば左守は紅に染つて縊れて居た。そして其處に三通の遺書が認めあつた。アリナは取るものも取りあへず自分宛のを封押し切つて讀み下せば左の通りであつた。

一、拙者事國王殿下のお見出しに預り日頃の願望を達し、國政に參與の榮を擔ひ居り

候處、今日玄眞坊、コブライ、コオロの無頼漢、左守たる拙者に向ひ無禮の言を吐き候も、これを咎むるの權威なく、止むを得ず金錢を與へて逃げ歸らし申候斯の如き左守の處置は國王殿下の發布されたる憲法を無視し、且蹂躪せる大罪にして、到底此儘職に留まるべき資格なく、國家の大罪人なれば、兩殿下を初め、右守殿其他國民一般に對し謝罪のため、皺腹切つて相果て申候。今後は何卒々々殿下を輔け奉り、タラハン國の基礎を益々鞏固ならしむべく、奮勵努力あらん事を願ひ申候

國家の大罪人シヤカンナより

右守殿參る

と認めてあつた。アリナは之を見るより驚き乍らもわざと素知らぬ顔を装ひ、城中に參

内して兩殿下に事の顛末を詳細に言上し、二通の遺書を捧呈した。あ、惟神 靈幸倍坐世。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 加藤明子録)

瑞 月

毛をふいて疵を求むる人々の

靈救はん心もむわれ

そむきたる人の靈もすてずして

高天に救ふ伊都能賣の教

第一四章 障

路 (一八〇三)

玄真坊、コブライ、コオロの三人は左守の情に仍つて、漸くに死罪を免れ、持てる丈の黄金を胴巻に押し込み、重たい腰をゆすり乍ら、人跡稀なる森林を探りて、一日一夜西へくゞ駆け出して行く。三人共身体繩の如くに疲れ果て、最早一步も歩めなくなつて了つた。

コブライ「モシ玄真さん、何程黄金を澤山貰つても體が達者になるといふでもなし、腹が膨れると云ふでもなし、斯うなつて見ると黄金も何の役にも立たないものですな。重たい許りでこんな事三日も続けやうものなら、到底命はありませんねワ」

玄真坊「馬鹿を云ふな、金さへ有れば、どんな甘い物でも食られるし、どんな別嬪でも

買はふと盛だ。今日は黄金萬能の世の中だからのう、着炭議員に成ろうとして五萬や十萬の金は要る。短命内閣の總理大臣に成ろうと思つても、二千萬兩や三千万兩の金が要るのだ」

コブライ「さうかも知れませぬが、斯う山林許し跋渉してゐては、別嬪も見付からず、甘いもの食はうにも、味無いもの食はうにも、テンで店屋も無いぢやありませんか。一千万圓の包より一升米が貴いやうに私は思ひますわ。アア何とかくして食料に有付き度いものだなア」

玄真坊「そんな弱音を吹くな。もう一日許り走れば安全地帯がある。其處へ行けば女郎も居るし、どんな綺麗な着物でも賣つてゐる。百味の飲食も待つてゐる。マ、其處迄辛抱したがる可からう、腹が空つて仕方なければ拇指の爪なつと甜つて居れ。そう

いつの間にかは知らね共 限も知らぬ大野原

さまよひ来る訝かしさ 道ゆく人も無きまゝに

言問ふ由もなく許り ありかにせん千秋の

恨を野邊に残しつゝ、 ありなき最後を遂ぐるのか

あゝ、淺ましやくゝ たらハン城の方面は

何處の空に當るやら 百里夢中にさまよひし

吾身の上こそ悲しけれ 原野に千草は生えぬれど

花も實もなき枯野原 吹き来る風さへ音もなく

鳥の聲さへ聞え来ず 寂光浄土が知らね共

天地一度に眠りたる 如き此場の光景は

淋しさたごふる物もなし あゝ、作神々々

三五教の大御神 導き玉へ永久の

棲處ご定めしたらハンの 城下に建ちし左守家へ

思へばくゝ人の身の 行末こそは果敢なけれ

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直し聞直し

身の過は宣直す 三五教の御教は

梅公別の師の君ゆ 完全に詳細に聞きつれど

見直す術も無きまゝに 名さへ分らぬ荒野原

吾等は何の罪あつて かゝる處へ落ちたのか

合點のゆかぬ世の中ぞ
 導き玉へ吾宿へ
 御靈幸ひましませよ
 月は盈つ共虧くる共
 誠の力は世を救ふ
 善と惡とを立別ける
 心も廣き大直日
 直日に見直す道ちやけな
 此世を造り玉ひたる
 人間界に身をおいて
 憐み玉へ大御神
 あ、惟神々々
 旭は照る共曇る共
 假令大地は沈む共
 神が表に現はれて
 此世を造りし神直日
 只何事も人の世は
 誠の力といふ事は
 眞の神の力だろ
 さうして眞が出るものか

眞の力の神さまよ
 何卒救ひ玉へかし
 三千世界の梅の花
 開いて散りて實を結ぶ
 此世を救ふ活神は
 なごご尊き宣傳歌
 只一輪の梅さへも
 地獄の道の八丁目
 かゝる淋しき大野原
 前世現界相共に
 吾等の淋しき境遇を
 偏に願ひ奉る
 一度に開く神の國
 月日と土の恩を知れ
 高天原に神集ふ
 肝に銘じて忘れぬぞ
 開いて居らぬ此野邊は
 八衢街道の續だろ
 さまよひ來る吾身こそ
 無限の罪を重ね來て

神の懲戒うけ乍ら 身魂を研いて居るのだから

死んだ覺のない吾れは 幽冥界にも思へない

あゝ惟神 々々 神が此世にあるならば

何卒吾身を導いて 戀しき吾家にかやせかし

偏に願ひ奉る」

斯く歌ひ乍ら、大野原に蚯蚓の這ふたやうについた細路を辿り行くに、土の中からムク／＼と頭丈が動いてゐる。シヤカンナは此淋しい原野の正中に松露のやうな頭が動いてゐるのは合點が行かぬと、手に持った杖で二つ三つこついてみるに「アイタ、／＼」と云ひ乍ら、月が山の端を昇るやうに、チクリ／＼と土から抜け出で、肩まで現はして来た。よく／＼見れば玄眞坊の姿そつくりである。シヤカンナは驚いて、

シヤカンナ「オイ、コラ、汝は玄眞坊ぢやないか。こんな所に何をしてゐるのだ」

玄眞坊「ヤ、私はお前にお詫をせんならん事があるのだ、確には覺えてをらぬが、お前の館へ行つて無理難題を吹きかけ、ドツサリ金をほつたくつて歸つた天罰で、幽冥主宰の神から澤山な黄金を罰則として體に縛りつけられ、其重みで體が地の中へに入込んで了ひ、今ヤツこの事で首丈地上へ現はした所だ。さうか「許す」と一言云つてくれ。そうすりや俺の罪も輕くなるだらうから……」

シヤカンナ「何だか俺は足がヒヨロ／＼するけれど、體が輕くて足が地上を離れ相で危険で堪らないが、お前は又體が重いとは不思議な事だのう、それぢやお前の首を千切つてやるから 胴柄位土に托しておいたらさうだ。何れ遅かれ早かれ土の中へ這入る體だからのう」

玄真坊「オイ兄貴、そんな無茶な事云ふてくれない。天一の作品師なら、首をチョン切つても又つけるだろうが、俺のはそうはいけないよ。さうか兄貴、金剛力を出して俺の體をグツと引き上げて貰へまいかの」

シャカンナ「體を引き上げと云つたつて、首から下が埋つてゐるのだから、手をかける所もないぢやないか、それでも強つて引き上げと云ふのなら、兩方の耳を掴んで試みやつてみやうかな」

玄真坊「さうでも可いから、兎も角一寸でも體を地上へ出してくれ、苦しくて堪らぬ、さうやら地の底の地獄へ引ばり込まれ相だ」

「ヨーシ」と云ひ乍らシャカンナは一生懸命に冷たい手で冷たい耳を掴んでみたが、磐石の如くビクとも動かない。そう斯うしてゐる所へ、又もや二人の男が、濡衣を纏ひ乍

ら、力なげにトボ／＼とやつて来る。シャカンナは後ふり向いて、

シャカンナ「ヤ、お前はコブライにコオロの兩人、さして又こんな淋しい所へやつて来たのだい」

コブライ「ヤ、親方で御座いますか、まづ御壯健でお芽出度う。實アはつきり覺えませぬが、お前さん所で金を貰つて歸る途中追手に出會ひ、谷川へ飛び込んだと思や、何時の間にか斯んな所へ来てゐます。併し飛び込んだ際に折角貰つた山吹色は皆谷底へ捨て、了ひ、今ぢや欠けたかんつも御座いませぬが、さうか親方、チツと許りお金を恵んで貰へますまいかな」

シャカンナ「俺だもて其通りだ。一文生中も身につけてゐないのだ。こんな所を旅行するのになし店もなし、金が要るものかい。腹が減つたら草でも千切つて食つて

行くより仕様がなないぢやないか」

コブライ「ヤ、其處にゐるのは玄真さんぢやないか、何ぢやい、首許り出しやがつて、……サ、起きたり〜」

玄真は目を無性矢鱈にジヤイロコンバスのやうに廻轉し始め、口も目も鼻も一所に集中し顔面筋肉を頻りに活動させ出した、

シヤカンナ「ヤ、此奴アさうやら地獄落ちらしいぞ。まだ黄金に執着心を持つてゐらし

いぞ、オイ、玄真、すつぱりその金を思ひ切つて了へ。そすりや助かるだろう」

玄真坊「ヤア、何程金が欲しうても、かう苦しうては慾にも得にもかへられないワ、モウ金はコリ〜だ、一文も要らない。オイ黄金の奴、今日から暇をやるから勝手に何處へ行つてくれ」

と云ふが否や、子供の玩具の猿が弓弾きに弾かれたやうな勢で、ボンと地上三間許りも飛び上り、ドスンと又元の所へ落ちて来た。

シヤカンナ「オイ、玄真坊、慾いふ奴ア怖いもんぢやのう」

玄真坊「本當にそうだ、おらモウ金にはコリ〜したよ。併しお前は結構なタラハン城の館を捨て、何故又こんな所へ来たのだ。チツと合點が行かんぢやないか、……ハハー、大方俺の金が借しうなつて、追駈て来たのだな。それで俺を器械仕掛で地の中へ電気でも引張つてゐやがつたのだなア」

シヤカンナ「馬鹿を云ふない。俺はモウ金なんか見るのも厭だ。併し俺は、今フツと思ひ出したがお前を逃がした跡で、確に神様の前で切腹をして果てた積だが、何故又こんな所へやつて来て生きてゐるのだろ。丸で狐につま、れたやうで、現界か幽界

かチツとも譯が分らないのだ。一体此處は何處だと思つてゐるか」

玄真坊「サ、さうも不思議で堪らんのだ。お前の話を聞くと、お前が俺より先死んだ者
とすれば、先に此所へ来て居らんならん筈だ。俺等三人は一日一夜山や谷を走つて
谷川へ飛び込んだやうな氣がする。それが先づ此處へ來てる筈がない。てもさても
合點の行かぬ事だのう」

コブライ「コリヤ何うしても、玄真さん、幽界旅行をやつてゐるのに違ありませんよ。

吾々はかうして生きてると思つてるが肉体はさうに死んで了ひ、精靈体許りが此所
へ迷ふて來たんでせう。靈界には時間空間の區別も無く、遠い近いもない相だから
先へ死んだ者が後へなる共、後から死んだ者が先へなる共、そんなこと分りませぬ
ワイ。マア死んだ者としておけや、後で驚かいて宜しかろ」

コオロ「オイ、コブライ、さうやらこりや地獄街道の八丁目らしいぞ。困つた事になつ
たもんぢやないか」

玄真坊「そうだ、一寸面食つたな、然し乍らかうして四人の道伴れが出來た以上は、淋
しさも稍薄らいで來たやうだ。兎も角、地獄でも何處でもかまはん、行ける所迄行
かうぢやないか。俺達や元より極樂に行つて無聊に苦むよりも、地獄へ行つて車輪
の活動をやるが望だからのう」

コブライ「其お説はハル山峠の岩上で承はりましたね、サ、行きませう。餘り淋しい
から一つ行進歌でも唄はふぢやありませんか」

玄真坊「そら面白からう、先づ俺から歌ふてやる。

玄真坊「限も知らぬ大野原 此所は地獄の八丁目

八衢街道か知らね共

三人の家來を引つれて

名さへ分らぬ荒野原

進みゆくこそ勇ましき

もしも此世に天國が

あるものゝすりや行つてみよう

無ければ是非なく地獄道

肩眩いからし進まうか

併し此世に地獄ごか

極樂なきがあるものか

さこ迄行つても此通り

冷い風がビュー／＼と

草の葉末をなで乍ら

遠慮もなしに通つてゐる

これがヤツバリ地獄だろ

何程地獄が怖く共

こんな事なら屁のお茶だ

ドッコイ／＼／＼シヨ

コラ／＼三人の家來共

しつかり後からついて來よ

落伍をしても知らないぞ

アレ／＼不思議アレ不思議

向方に妙な建物が

チラ／＼吾目につき出した

此奴ヤツバリ現界か

現界ならば尙の事

一生懸命にはしやいで

元氣をつけて行かうかい

タラハン城を占領し

天晴國王と成すまし

羽振を利かそと思ふたに

いつの間にかは知らね共

こんな所へ彷徨ふて

東西南北方位さへ

分らぬ今日の不思議さよ

向方に見ゆる建物は

鬼か惡魔の住處だろ

サア／＼行かうサア行かう

何をビリ／＼しこるのだ

もしも地獄があるならば

地獄の鬼を引捉へ

蟻のやうに竹串に

並べて刺して火に炙り

片つ端から食てやろか

ら、面白いく

地獄の王の御出立

鬼でも蛇でもやつて来い ドッコイ〜〜〜シヨ

なきこ一生懸命に歌ひ乍ら、頭を前方に突出し、チヨコ〜〜〜走りに進んでゆく。三人は四五丁許り取り残され、ヨボ〜〜〜細い聲で行進歌を歌ひ乍らついて行く。

玄眞坊は足許ばかり見詰めて突進した途端に四辻の立石に頭をぶつつけ、キヤア、ウーンと云つたきり、其場に蛙をぶつつけたやうにふん伸びて了つた。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 松村眞澄録)

第一五章

紺

靈

(一八〇四)

シヤカンナ、コブライ、コオロの三人は玄眞坊の姿を見失はじと行進歌を歌ひ乍ら進んで来る。コブライは甲聲を絞り乍ら、

コブライ 「玄眞坊の慌て者

大野ヶ原を吹く風に

驚きをつたか魂消たか

頭を先に尻後に

突出し乍ら不細工な

スタイルさらして行きよつた

彼奴のやうな慌て者

生みよつた親の面が見たい

蛙のやうな面をして

トンビのやうな尖り口

物云ふ度に目と鼻と

口を一つによせる奴

もしも地獄があつたなら 地獄の町の見世物に

出したらよつくはやるだろ あ、面白いく

オーラの山に立籠り ドエライ山子を企みよつて

目算ガラリミ相外れ ダリヤの姫には目尻下け

面を草紙に使はれて 大きな耻をかき乍ら

蛙の面に水かけた やうな彼奴の無神經

呆れて物が云はれない 又もや一つの大望を

企むは企んでみたもの、これ又ドエライ失敗で

火事場泥棒のやり損ね 左守の箆で捕へられ

冷たい牢屋へブチ込まれ 右守の司の訊問を

シャーツクシャアの香氣相に 煙にまいて答辯し

左守の箆に引き出され 又も業詭相並べ

お庫の金を取り出して 己がボツボへ托し込み

夜晝なしに山路を 走つた揚句に情なや

捕手の奴に見つけられ 千尋の谷間にザンブリミ

俺等と共に飛び込んで 命死せしと思ひきや

こんな所へやつて来た 不思議もくこんな又

不思議が世界にあるものか 玄眞坊の慌て者

アレくあここに倒れてる 野壺のはたのクツ蛙

掘んで大地にぶちつけた やうなザマしてフン伸びて

ビリ／＼慄ふてけつからア 何と因果な奴だなア

此有様を眺むれば お氣の毒でもあるやうだ

又々小氣味がよいやうだ こんな奴等を只一人

助けてみた所で仕よがない とは云ふものゝ俺たちも

こんな淋しい街道を 行くのにや人数が多い程

心が丈夫になるやうだ 厭でも助けてよか

コラ／＼／＼／＼玄真坊 早くしつかりせぬかい」

胸の頭の嫌ひなく グチャ／＼／＼と踏み込めば

ウンと許りに呻きつゝ 息ふき返し玄真坊

玄真坊 「アイタタタツタ アイタタタ 俺の頭を踏みやがった

肋の骨を二三本 さうやらコブライが折りよつた

元の通りにして返せ 親から貰ふた大切な

一生使ふ寶だぞ アイタタタツタ アイタツタ

コレ／＼シヤカンナ左守さん 私の仇を討つておくれ

さしても虫がいえぬ程に あゝ惟祈 々々

目玉飛び出し相だわい」

なきと體も動かぬ癖に腮許りを叩いてゐる。

コブライ「ハ、、、オイ玄真さん、起きたらさうだ。體も動かぬ癖に毒つきやがっ

て何のザマだ。サア起きたり／＼、起きな起きんで可いわ、吾々三人は放つていて

行くからのう。仇討つてくれの何のつて、馬鹿にするない」

玄真坊「オイ、コブライ、そう怒るもんぢやないワイ、三つくりと話を聞いてくれ。仇を討つてくれといふのは、此途端の立石を叩き毀してくれと云ふのだ。此奴があつた許りに、俺がこんな目に遇ふたんだもの」

コブライ「ナール程、此奴ア怪体な石だな。ヨーヨーくくく、目が出て来たぞ。それ鼻だ、口だ、耳迄生えて来たぞ。此奴、化立石だな」

立石は俄に白髪の姿に變じ

「ギヤアハ、、、コラ盲碌共、俺を誰だと思得て居るか、俺は月の國でも名高い小夜具染のお紺と云ふ鬼婆だぞ」

コブライ「ナニ、小夜具染のお紺？、丸で狐みたいな奴だな。小夜具染でも椿染でも構ふもんかい。そんなヒヨロくした婆アの態をしやがつて、偉相な口を叩かない。

俺を何方と心得てけつかるのかい」

お紺「ギューフッフ、、、」

コブライ「コラ、お紺、ソーラ何吐してけつかるんだい。ギユフ、、、とは何だい。それ程牛糞が欲しけり、そこらの街道を歩いて来い、馬糞も牛糞も澤山落ちてるワイ
大方汝ド狐の化そこねだろ」

お紺「グヅく吐すこ、わいらも一緒に食つてやるか。折角玄真の野郎を食つてやるうと思へば汝達が出て来やがつて邪魔をさらすものだから、聊か困つてゐるのだ。エ、グヅくさらさずに早く何處へ行け。サアこれから汝等が通つた後は、此お紺が玄真坊の體を叩きにして團子に丸めて食つてやるのだ、ギョーホツホ、、、何とはなしに甘相な臭がするワイ……………のう」

玄真坊「オイ、コブライ、シヤカンナの兄貴、コオロの乾兒、メツタに俺を見捨てやせ
うまいの、此婆アを平らけてくれないか」

シヤカンナ「ウム、さしたら可かろかの。コブライ、お前は如何する考へだ？」
コブライ「……………」

お紺「喧ましいワイ、泥棒許りがよりやがつて、何をゴテく云ふのだ。汝の制敗さ
る、所は此先にある、樂んで行つたが可かろうぞ。此玄真坊と云ふ奴、此お紺と云
ふ女房があるにも拘らず、梅香と云ふスベタ女郎に現をぬかし、俺に空聞を守ら
せた無情冷酷なクソ爺だ。其恨が重なつて道端の立石となり、玄真坊の賣僧が、通
りやあがつたらしくと、寒い風に吹かれ乍ら、此所に待つてをつたのだ。サ、モウ
斯うなりや最早百年目、ヂタバタしても叶ふまい。小夜具染のお紺の面を見覚えて

居るだろな」

と云ひ乍ら、カッく喉を鳴らした途端に、バツく火を吹き出し、玄真坊の禿頭
を、紅蓮の舌で嘗め盡す。其熱さ苦しさに、玄真坊は手足をジタバタさせ乍ら、蚊の鳴
くやうな聲を出して

玄真坊「オーイ、シヤカンナ、助けてくれ〜」

といふ聲さへも次第々に細つてゆく。シヤカンナは見るに見かねて、一生懸命に「一
二三四五六七八九十百千萬」と天數歌を歌ひ終るや、小夜具染のお紺の姿は煙草の
煙の如くにフワリ〜と空中に揺れ乍ら消えて了つた。

不思議にも玄真坊は體の自由が利き出し、又もや一行の先に立ち、性こりもなく、頭
を先に尻を後にホイ〜と蝗の蹴り足宜しく細い脛をふん張り乍ら進み行く。三人は又

もや玄眞坊に瞬く内に二三町計り遅れて了つた。

コブライ「モシ、シヤカンナさん、餘程玄眞坊は罪な男と見えますな。あのお紺といふ奴、一遍玄眞坊と結婚したに違ありません、玄眞坊ぢやなくつても、あの面では私だつて厭になりますワ」

シヤカンナ「サア結婚か、お紺か、み紺か知らぬが随分難かしい御面相だつた。斯様な妖怪が出没する以上は、ヤハリ地獄の八丁目に違なからうよ、マアポツ／＼前進することにせうかい」

コブライ「何だかそこら中が淋しくなつたぢやありませんか、丸切壺を被つてるやうな気分になりました。コオロ、お前は如何だ」

コオロ「俺だつて、矢張淋しいワイ。然し乍らお紺でもお半でもよいから、チヨイ／＼

出てくれると退屈さましなにつて可いぢやないか。玄眞坊にやチツと許り氣の毒だ
けれきのう」

コブライ「サ、御兩人、参りませう」

と云ひ乍ち先に立ち、

コブライ「思へば／＼不思議なる 妖怪變化が現はれて

怪態な面を見せよつた 玄眞坊の慌て者

こんな街道の真中で よい恥さらしをやりよつた

彼奴もチツとは良心の かどやき亘るを相見えて

俺等三人を後に置き 逃げるが如くに行きよつた

思へば／＼可哀相ぢやな サア／＼之から氣をつけて

行かねばぎんな妖怪が 出現するかも知れないぞ

氣をつけめされよ御兩人 入衢街道の不思議さは

到底現界ぢや見られない あゝ面白い怖ろしい

恐い悲しいヂレツたい 思へばく情ない

あゝ、惟神々々 目玉が飛び出し相だワイ

玄真坊は一生懸命に進行歌を唄つてゐる。

玄真坊「あゝ、恥しやく

執念深くも道端に

俺の通るを待伏せて

ホンに女といふ奴は

昔の俺の女房が

石の柱に化けよつて

きぎつい憂目に合せよつた

仕末に了へぬ代物だ

きつく叱れば吠えくさる

之は天下の通弊だ

殺した覺はなけれ共

執念深くも化けて出て

優しく云へばのし上る きつく叱れば吠えくさる

殺してやつたら化けて出る 之は天下の通弊だ

お紺の奴は俺の手で 殺した覺はなけれ共

倍氣の深い奴と見え 執念深くも化けて出て

俺を食はふと云ひよつた ても怖ろしい婆アだな

あんな女にかゝつたら 糞桶へ兩足を

突込んだよりもまだ辛い 苦しい思ひをせにやならぬ

金と女と云ふ奴は 吾身を亡ぼす仇敵と

今や漸く悟りけり 金は云ふものゝ何處迄も

金と女は捨てられぬ 人と生れた上からは

さしても女と黄金が

無ければ此世が渡れない

善悪互に相混じ

美醜互に交はつて

此世の總が出来るのだ

之を思へば地獄だぞ

云つた所で何怖い

地獄の中にも極樂が

キツと設けてあるだろう

それを思へば幽冥の

旅路も結局面白い

ドッコイ／＼／＼シヨ

アイタ、、タツタ アイタタツタ

何だか知らぬが足許に

喰つきよつたに違ない

皆の奴は何してる

さつてもさてもコンバスの

弱い奴等は仕様がな

俺はテクシーの自動車で

一瀉千里の勢で

こんな所迄やつて来た

彼奴等三人の姿さへ

吾目に入らぬ遅緩しさ

一筋道の此街道

外へは迷ふ筈がない

あ、待ごうやじれつたや

アイタ、、アイタタツタ

又もやこんな街道の

さう真中に立石が

出しゃばりやがつて俺達の

頭をコンとやりよつた

今度はそうは行かないぞ

一二三四五つ六つ

七八九つ十百千

唱へてやつたら滅茶々に

烟になつて消えるだろ

一二三四五つ六つ

七八九つ十百千

萬の神の御降臨

偏に仰ぎ奉る

あ、惟神々々

恩頼を垂れ玉へ

不思議や立石は煙の如く中空に消え失せて了つた。玄真坊は何だか前進するのが俄に恐ろしいやうな気がし出したので、少時路傍に佇んで三人の落伍組を待つてゐると、一行はヤツミの事で此場へ追つ付き來り、

シャカンナ「ヤ、逆も早いコンバスだのう、又お紺に出會つたのだろ」

玄真坊「お察しの通り、お紺何か知らぬが、又もや石柱が飛び出しやがつて、頭をお

コンミ打たしやがつた。けれ共な、お前の數歌の受賣をやつた所、烟になつて、コツクリコと消えて了つたのだ。ても偕も數歌の威力といふものは偉いものだワイ……

……と此様に今感じた處だ」

シャカンナ「オイ玄真、向方に嚴しい赤門が見えるぢやないか」

玄真坊「ウンそうだ、いよく赤門だ。何だか小氣味が悪いので、實アお前の追付くのを待つてゐたのだ」

シャカンナ「ハ、ハ、ハ、ヤツバリ偉相に云つても、心の大根は弱い所があるぞ見えるワ

イ。サ、俺が先頭に立つから、お前等從いて來い」

と云ひ乍ら、シャカンナは一行の前に立ち悠々と赤門に近づいた。冥府の規則として白赤の守衛が二人嚴然と控えてゐる。

赤「コリヤ、其方は何者だ」

シャカンナ「ハイ、私はタラハン城の左守の司シャカンナと申す者で御座います」

赤は横に細長い帳面を繰乍ら

赤「成程、お前さんの命数は盡きてゐる。直様天國へやつてやりたいは山々だが、チ

ツミ許り入衛に修業をして貰はねばならぬかも知れぬ、何事も伊吹戸主の御裁断を仰いだ上の事だ。サ、お通りなさい」

ビシヤカンナの尻を叩けば、シヤカンナは風に木の葉の散る如く、フワ／＼／＼と門内に翔つやうにして這入つて了つた。赤は玄真坊に向ひ

赤 「オイ汝は玄真坊と云ふ悪僧だろうがな。汝はさうしても地獄代物だ、然し乍ら未だ命數が残つてゐる。現界に未だ籍のある奴ア、此處の管轄區域ぢやない、サ、トツミ、歸れツ」

玄真坊 「成程、随分私は悪僧で御座います。然し乍ら一つも成功した事は御座いませぬ。何れも未遂犯で御座いますから、さうぞ大目に見て下さい」

赤 「エー、ゴテ／＼云ふな、歸れといつたら歸らぬか」

と二錢銅貨のやうな目玉を剝出せば、玄真坊は慄ひ戦き縮こまつて了ふ。

赤 「オイ、そこなる兩人、其方も矢張泥棒稼をやつてゐる奴だろ、コブライにコオロ

と云ふだろ」

コブライ 「お察しの通りで御座います」

コオロ 「其通りで御座います」

赤 「汝も仲々罪の重い奴だが、未だ現界に籍が残つてゐる。サア、一時も早く立ち歸れツ」

と赤門をビシヤツと閉め、自の守衛と共に門内に姿をかくした。三人は已を得ずトボ／＼と元來し道を七八丁許り引き返したと思へば、自分の耳元にやさしい女の聲が、電話がかゝつて來たやうな程度で聞えて來る。三人は揃ひも揃ふて一度にバツと氣がつき

四邊を見れば、自分はタラハン河の河下に何人かに救ひ上げられ、澤山の見物に取まかれ、一人の綺麗な女に介抱されてゐた。此女はトルマン國を抜出した妖婦千草の高姫であつた。

以上は 魁 った玄真坊以下の幽界想念の幕である。

(大正一五・一・三一 舊一四・二・一八 於月光閣 松村真澄録)

瑞 月

何事も神のみむねにまかすべし

人の身をもてまゝならぬ世は

第 三 編 慘 嫁 僧 目

第一六章 妖 魅 返 (二八〇五)

タラハン城市を西へ距る三十里許りの所に岩瀧村と云ふ小部落がある。此所には魚ヶ淵と云つて、蒼み立つた可なり廣い水溜があり、澤山な魚が四季共に集中してゐる。印度の國の風習として妄に生物を食はないので、魚類は日に／＼繁殖する許りであつた。水一升魚一升と稱へらる、此魚ヶ淵へ時々漁に行く首陀があつた。淨行や刹帝利や毘舍などは決して魚を漁つたり、殺生等はやらないが、首陀となるに、身分が低い爲始んど人間扱をされてゐないので、何程殺生をしても神佛の咎は無いと云ふ信念が一般に傳はつてゐた。然し乍ら淨行、刹帝利、毘舍と雖、生きた者を食はない許りで店舗に賣つてゐる魚ならば代價を拂つて買求め、之を食膳にのほす事は別に殺生とも感じてゐない

のである。夏木茂れる川縁の木蔭に腰打かけ雑談に耽り乍ら、四五人の首陀が魚漁の用意をやつてゐるに、淵へ舞込んで来た三つのコルプスがあつた。首陀は先づ岩上から此コルプスに向つて網を打ちかけ、漸くにして道傍に拾ひ上げてみた處、一人はさうしても修験者の果らしく、二人の奴は何處共なしに泥坊らしい面相をしてゐるので、古寺の坊主を呼び葬式をすることに、なつた。泥坊なんかは其死骸を虎狼の餌食に任して省みないが修験者になれば何うしても捨て、置く譯には行かぬと云ふので、珠露海といふ吉凶禍福や卜筮等を記した經文の記事を案じて、五行葬の何れに爲さんかをやつてみた處此修験者は何うしても土葬にせならんと云ふ占が出たので、村人が寄つて掛つて、體を其儘土の中へ埋け、印を立てる代りに耳から上面を出して置いたのである。五行葬の中には野葬、木葬、火葬、土葬、水葬と云ふ五つの葬式法がある。そして木葬と云ふの

は、コルプスを木の上に掛けて置き、風に晒す葬式法である。此珠露海の卜筮にかゝらない者は神の冥護のない者として死屍を路傍に捨て、置く事になつてゐた。斯かる所へ四十前後の美人が宣傳歌を歌ひ乍ら近より來り、路傍に遺棄してある二つの死骸を眺め乍ら、

女 「あ、何處の何人か知らぬが可哀相に、コラ、土左衛門になつた處を誰かに引き上げられたのだらう、まだ着物はズック／＼になつてゐる。こつちふ所に放つて置けば犬や鳥の餌食になるだらう。何ミかして此奴を助け自分の從者にしてやりたいものだ。ア、ウラナイ教の大神守り玉へ幸ひ玉へ」

と云ひ乍ら、白い細い籠甲細工の如うな手を兩人の額にあて、一生懸命に祈願し始めた然し乍ら何程ウラナイ教の大神を念じても効験が無いので、今度は試みに、三五教の大

神と神名を變へて一心不亂に念願するに、兩人の體に迫々温みが廻り、半時許りの後にやうく息を吹き返し、ムクムクと起き上つて、救命主の大神を謝し、涙乍らに感謝した。此女はトルマン城を脱出した千草の高姫である。千草は城内を逃げ出してから、人通の少な相な山野を選んで此所迄やつて來たが、初めて二人の死者を甦らせ、得意の頂點に達し、

千草姫「コレくお前達は何處の泥坊さんかは知らね共、此千草の高姫が此處を通らなかつたならば、玉の緒の命は既に已に十萬億土と云ふ所へ行つて了つて、二度と再此世へ歸ることは出来ないのだよ。一体お前の名は何と云ふ名だい、それを聞いて置かねば、日出神の生宮が大ミロク様へ御禮を申上けることが出来ないからなア」

男「ハイ、私はコブライと申します。モ一人はコオロと申しまして、實はタラハン城の左守の司の幕下で御座いましたが、フトした事から勘當を受けまして身の置き所なく、タラハン河へ身を投げましたので御座います。其所を貴女様にお助を願ひ、斯様な嬉しい事は御座いませぬ」

千草姫「ア、そうかいナ、そりやお前、命のよい拾物だよ。此千草姫は地上の人間ぢやありませんぞえ。第一靈國の天人、日出神の生宮、大ミロクの太柱、千草の高姫と申す者だが、衆生濟度の爲之から月の國七千餘國を巡歴する積だから、お前等二人は此千草の兩腕となつて、天下國家の爲に大々的活動を爲し、天下に名を擧げる氣はないかい。そしてお前等二人はこんな悪い事をしたのだい。主人から勘當を受けるといふ事は、よくくの事ではければ無い筈だが」

コブライ「ハイ、お恥しう御座いますが、玄眞坊と云ふ天帝の化身と稱する修験者の泥坊様と一緒に、左守の司の館へ忍込み、金庫の錠を振折つてる所を捉へられ、牢獄へ打込まれたので御座います」

千草姫「何さまア、お前も、面にも似合ぬ悪黨だな、アハ、ハ、ハ。善に強ければ悪にも強いと云ふ諺もある、その方が却て頼もしい。そして其玄眞坊と云ふ修験者は如何なつたのかい」

コブライ「ハイ、三人一緒に身投をしましたが、其後氣絶をしたものですから、如何なつた事か斯うなつた事か、チツとも存じませぬ」

千草姫「如何にも、そらそうだろ。然し乍ら此所に首丈出して埋げられて居るコルプスがあるが、此面にお前覚えはないかの」

三問許りの傍の新幕を指し示す。コブライ、コオロの兩人は一目見るより

兩人「ア、玄眞さん……で御座います。何さま偉い事になつたのですな、何卒此奴も助けてやつて下さいますまいか。私等二人は貴女に助けられたとは聞きますが、死んでゐたので何も分かりません。本當のこた、お前さんの神力で助かつたか、又はハタの人に助けられたか分かりませぬが、目の前で此玄眞さんを助けて下さつたら彌々吾々二人をお前さんが助けて下さつたといふ証據になりますからなア」

千草姫「コオラ、奴、何といふ口巾つたい事を申すのだい。此千草の高姫の神力によつて命を助けられ乍ら、左様な挨拶があるものか。然し乍ら無智蒙昧な人外人足だから何も分ろまい、議論よりも實地だ。それではお前の疑を晴らす爲に、千草姫が今神力を見せてやらうぞや。此修験者が助かつたが最後、どこ迄も此千草に絶對服

従をするだらうナ」

コブライ「そら、そうです共、そうでなくても、貴女にこそ迄も従ひますと約束をした
んですもの、現當利益を見せて貰へば文句はありませんせぬワ」

千草姫「之から私が此修験者を 甦らして見せるから、キツミ神様のお名を覚えて居つ
て、其御神徳を忘れないやうにするのだよ」

と云ひ乍ら、首から上へ出てゐるコルプスの額に白い柔かい手をあて、「ウラナイ教の
大神救ひ玉へ、助け玉へ、惟神 靈幸倍坐世」
と一生懸命に汗をタラく流し、祈れど
くゞピクもせぬ、甦り相な氣配もない。千草の高姫は二人の前で大法螺を吹いた手
前、如何しても此奴を生かさねばおかぬと益々一生懸命になる。殆んど半時許り祈れど
願へど、矢張コルプスは氷の如く冷たい。流石の千草も我を折り「三五教の大御神守

り玉へ許し玉へ」と宣直した。忽ち額に温みが廻り、青黒い面は鮮紅色を帯びて来た。
千草は此處ぞと一生懸命に「三五の大神守り玉へ幸ひ玉へ」と祈るにつれ、大地はビリ
くゞ震ひ出し、コルプスを中心として四方八方に地割がなし、「ウン」と一聲靈をか
けるや否や、玄真坊の死体は三間許り中天に飛び上り、ドスンと元の所へ落ちた拍子に
バツと氣がつき、目鼻を一所へよせて、四邊を二三回見廻し乍ら、

玄真坊「ヤ、其處に居るのは、コブライにコオロちやないか。あーア、怖い夢を見たも
んだのう」

コブライ「若し、玄真坊さん、夢所の騒ぎやありませんよ。吾々三人は追手に出會つて
進退谷まり、谷川へ投身して已に土左衛門となつて居つた所、村人に死体を拾ひ上
げられ、お前さんは修験者の事にて、首丈出して、鄭重に葬られてあつたが、吾々

二人は地上に遺棄されてゐたのだ。そこへ此お姫さんが通りかゝつて、靈心か何にかをかけて助けて下さつたのですよ。現にお前さんを助けて下さつたのを實地目撃したのは此コブライ、コオロ、サアノ御禮を申しなさい。此お姫さんで御座いますワイ」

玄真坊「あ、これはく、能くまアお助け下さいました。でも儲も御容親のよいお姫さんで御座いますこと、エへ、、、。之といふのも全く神様のお仕組で御座いませう丸切暗の國から日出國へ生れ變つたやうな氣分が致します。命の親のお姫さま、之から如何な事でも貴女の御用なら勤めますから、何卒可愛がつて使つて下さいませや」

千草姫「ホ、、、何さまア、之丈に念入りに不細工に出来上つた面は見た事はありませぬワ。然し乍らきこ共なしにキューパーさんに似た所がある様だ、之からお前さんも、此千草の高姫がおイドを拭き云ふたら、おイドでも拭くのですよ。命を助けて貰ふた御恩返しと思ふて、口答一つしちや可くませぬぜ」

玄真坊「ヤ、如何な事でも承はりませうが、お尻を拭く事丈は、私の人格に免じて許して頂きたいものです。貴女の尻拭きする位なら、助けて貰はぬ方が何程幸福か知れませんか」

千草姫「ホ、、、嘘だよ、お前さんの面は一寸人並優れて變つてゐるが、きこ共なしに目の奥に才氣が満ちてゐるやうだ。お前さんを何かの玉に使つて、一つ仕事をやつたら面白からう」

玄真坊「ヤ、そこ迄私の器量を認めて頂けば満足です。私も今は斯うなつて、みすほら

しい風を致して居りますが、オーラ山に立籠り、シーゴ、依子姫なきの豪傑を幕下に使ひ、三千の部下を従へ、印度七千餘國を吾手に握らんと計畫してゐた天晴な大丈夫ですよ」

千草姫「あ、お前さんが、彼の名高いオーラ山の山子坊主だつたのか。ヤ、そら可い所で會ふた、佳い者が見付かつた、可い拾物をした。さア、之からお前さんと夫婦と化込んで、一つ仕事をやらうぢやないか」

玄真坊「成程、面白からう、夫婦にならうと云ふたな、其舌の根の乾かぬ内に女房と呼んで置く。コラ女房、千草姫、第一靈國の天人、天來の救世主、天帝の化身、天真坊の宿の妻、ヨモヤ不服はあるまいなア」

千草姫「お前さんと夫婦になる事丈は異議ありません。然し乍ら妾こそ、第一靈國の天人、日出神の生宮、底津岩根の大ミロクの大柱、三千世界の救世主、千草の高姫だから、神格の上から、此千草の高姫が主であり、お前さんは従僕となつて貰はねばならぬ靈の因縁だよ。肉体上からはお前さんが夫で千草が妻と定めて置ませう。お前さんの天帝の化身は自分が拵へたのだらう。そんな山子は之からは駄目ですよ。正真正銘の第一靈國の天人でなけら、肝腎の場合に於て、名實伴ふ活動が出来ませんからな。こんな所へ首丈出して埋けられてるやうな神力の無い事で、天帝の化身なんて言つて貰へますまい」

玄真坊「イヤ、モウ、天帝の化身も、第一靈國の天人もお株を、女房のお前に譲らう、お前を女房にさへすりや、俺やモウ満足だからのう」

千草姫「厭ですよ、譲つて貰はなくても、元から第一靈國の天人、日出神の生宮、大ミ

ロクの太柱、三千世界の救世主、千草の高姫ですもの」

玄真坊「あ、何と上には上のあるものだな。これ丈の美貌と辯舌とでやられたら、大抵の男は参つて了うだろ」

千草姫

「そら、そうです共、トルマン國の王妃を棒に振つて、只一人猛獸の猛り狂ふ原野をやつて来るこいふ豪の女ですもの、そんなこた、云ふ丈野暮ですワ、ホ、

、

コオロ「何とマア、偉い方許り寄られたもんですな。のうコブライ、丸切り狐に魅まれ

たやうちやないか」

コブライ「俺や、モウ開いた口がすほまらんワイ」

千草姫「コレく、其處の奴さん、何と云ふ無禮の事を云ふのだ。ミロクの太柱が現はれ

てるのに、狐に魅まれたやうだとは何ちやいな。之から狐のキの字も云つては可
けませぬよ」

コオロ「ハイ恐れ入りまして御座います、玉藻前の芝居に出る金毛九尾さんの御面相に
餘りによく似てるもんだから、つい狐のやうだと申して、御機嫌を損ねましたのは
平に御詫を致します」

玄真坊「あ、何うやら日が暮れ相だ。さつかへ宿を求めて、今晚はゆつくりと語り明さ
うちやありませぬか、……………ナニ違ふく。オイ女房千草、さつかで、宿を求めて
緩くり休まうかい、ヨモヤ厭とは申すまいのう」

千草姫「ホッホ、立派な御主人が出来たものだ、之でもひだるい時に不味ものなし
だから……………ホ、、、」

と小聲で笑ふ。玄真坊は半分許り聞かじり

玄真坊「コラ女房、さう心配するものぢやない、決して不味物は食はさないよ。ひだるい目もさ、ないから、俺に任しておけ。お金は此通り、胴巻に一杯つめてあるからのう」

といひ乍ら、腰の邊に手をやつてみてビツクリ、

玄真坊「ヤ、何時の間にか所持金が無くなつてゐる。コラ、コブライ、汝が奪つたのぢやないか」

コブライ「そんな殺生な事云ひなさんな、何程泥棒でもお前さんの金まで奪りませんよ私共も川へ飛び込んだ時、皆川底へ落して了つたんです。此通無一文です。コオロだつて其通り、一文だつて持つてゐやしませんで」

玄真坊「あ、困つた事だの、それぢや、今晚宿屋へ泊る譯にはゆかず、何ぞか工夫はあるまいかのう」

千草姫「ホ、ホ、何ぞまア、スカン貧の寄合だこゝ、金でも持つて居り相なと思ひ、こんな茶瓶頭の蜥蜴面に秋波を送つて見たのだけれき、文無しと聞いちや、愛想もコソも盡き果て、了つた。エーエ穢らはしい。何所なつとお前さん勝手に行きなさい、此千草は一文の金は無くても此美貌を種に、如何な宿屋にでも贅澤三昧をして泊つて見せませう。然し乍らお前さんのやうなガラクタが従いてると、女盗賊と間違へられるから御免蒙りませう、左様なら」

と立上らうとする。玄真坊は一生懸命に足にくらひつき

玄真坊「コラ女房、一夜の枕もかはさずに、家飛び出すと云ふ事があるか、せめて今

宵一夜は待つてくれ」

千草姫「野つ原の中で、家を飛び出す飛び出さんもあるかい、宿無し者奴、死損ひの蝮

坊主、おイドが呆れて雪隠が踊り出すワイ」

とふり切り逃げ様ごもがく。

玄真坊

「オイ、コブライ、コオロの兩人、女房を確り掴へてくれ。俺一人ではどうやら取放しさうだ」

コブライ、コオロは兩手を擴けて、前に突立ち、

「コレ／＼奥さん、そう短氣を起しちや可けません、餘り水臭いちやありませんか
小判は吾々三人が動けぬ程腰へ捲いて来て、淵へ落したんですから、御入用とあれ
ば命を的に川底から拾ふて見せます、さうか短氣を起さん様にして下さいませ」

千草姫

「ホ、、、一寸、餘り好きな玄真さんだから、愛の程度を試す爲に嘲弄つてみた
のですよ。さう迄も玄真さんは此千草姫を愛して下さいさる云ふ事が、只今の行動に
仍つて證明されました。一遍に澤山の黄金の必用も無いけれど、此千草が命令する
毎に、お前さんは此淵へ飛び込んで、其金を拾つて来るでせうなア」

コブライ「へー、仰せ迄も御座いません、私だつて可惜寶を水底に捨て、置くのは勿体
なう御座います。のうコオロさうぢやないか」

コオロ「ウンさう共々、俺と汝の寶はキーツと飛び込んだあの淵に納まつてるに違な
い。併し玄真さんのお寶は、滅多に川へ飛び込んでも體を離れる理由がない。あれ
丈しつかりと胴巻に縛りつけてあつたんだもの。ヒョツとしたら、此墓を掘つて見
よ。此底にあるかも知れぬ。モシ玄真坊さん、一寸天帝さんに伺つて下さいな」

玄真坊「ウン、確にある、掘つてみてくれ」

コブライ「ヤ、貴方のお言葉とあらア間違御座いますまい、サ掘ろう」

二人は爪が坊主になる所迄土を掻き分けて底へくぐり込んだ。五尺許り掘つた所に胴巻ぐるめ、ドスンと重たい程黄金が目をもいでゐた。コブライは飛び立つ許り喜んで、

コブライ「モシく、玄真さん、有りましたく、喜んで下さい」

玄真坊「そらそうだろ、汝等二人の黄金は身につけてゐないのだ、俺は身についた金だから此通残つてるのだ。サ、兩人早く持ち上げてくれ。コレく女房、さうだ、一寸此金を見ろ、之は皆俺の金だ。これ丈ありやお前と俺とが三年や五年呑つゞけても大丈夫だよ」

千草姫「何と貴方は偉いお方ですな、私の夫として耻しからぬ人格者ですワ、ホ、ホ、コレくコブライ、コオロの兩人、御苦勞だつたが、まだ此底を三尺か二尺掘つて下さい、ダイヤモンドがありますよ。私の神勅によつて黄金以上の物があるといふ事が分つたから……」

コブライ「エ、承知しました、貴女の仰せなら地の底迄でも掘りますよ」

コオロと兩人が汗みぎろになつて、土を掘り上げてゐる。玄真坊千草の二人は舌をべろりと出し、手早く二人を生埋めにせんと、一生懸命に土を上から投げ込み、側にあつた立石をドスンと載せ、立石の上に腰うちかけ乍ら、モウ之で大丈夫と云ふやうな面構で、スバリく千草姫の煙草を引たくつて吸ふてゐる。

千草姫「何とマア厄介者が二人ゐやがる、如何したら可からうと心配でならなかつたが

矢張以心傳心、お前さんの心と私の心はピッタリ合ふてゐるとみえて、一言も云はずにこんな放れ業をやつたのだから妙ですなア」

玄真坊「本當にそうだ、實ア俺は此奴を埋込んでやろと思つたが、お前もそうだったか、こんな奴がウロツキやがる。二人の戀の邪魔になるし將來の手足纏になるが、之から二人でさつか宿へ泊るか、見晴のよい山へ上つて神秘の扉を開くか、或は神樂舞でもやつて、今日の結婚の内祝でもせうぢやないか」

千草姫「そら面白いでせう。宿屋に居つても怪しまれる。一寸具合が悪いから、そんな今夜は月夜を幸、あのコンモリした森迄行きませう。あの森にはキツと古堂位は建つてゐるでせうからね」

玄真坊「オイ、モウ少時此上で頭張つて居らねば、彼奴が生返つて後追かけて來たら大變だぞ」

千草姫「ナーニそんな心配が要りますものか、此千草姫の神力で靈縛をかけておきましたから、穴の底で石の如くに固まつてゐますよ。サ、參りませう、コレ玄真さん、みつともない、涎を拭きなさいナ」

玄真は慌て兩の手で涎を手繰り、膝のあたりに兩手をこすりつけてゐる。

千草姫「マア、厭なこと、玄真さん涎の手を膝で拭いたり、丸で着物と雑巾と一つだワ、ホ、ホ、」

之より兩人は月夜の路を南へ取り、コンモリとした山を目當に走りゆく。

(大正一五・二・一 舊一四・二・二九 於月光閣 松村眞澄録)

第十七章 夢 現 神 (一八〇六)

千草の高姫、玄眞坊の二人の計略にウマ／＼とかけられ穴の中に生理にされたコブライ、コオロの兩人は命カラ／＼穴から這ひ出し、泥まぶれになつて息をつき乍ら

コブライ「オイ、コオロ、さてらい目に遇はせやがつたぢやないか、狸坊主と狐女郎奴が。本當にいゝ馬鹿を見たぢやないか」

コオロ「本當に俺やもう、憎らしうて堪らんワイ。然しあの女は何處ともなしに可愛い奴だ。假令生理にされて死んで了つても元々ぢやないか。憎らしいのは彼の玄眞坊だ。之から何處々々迄も後追つて生首引捉へ腹癒せをしやうぢやないか」

コブライ「ウン／＼、そりやそうだ、俺等を助けて呉れた千草姫が俺等を殺す筈はない

玄眞坊が千草姫の前で舊悪を云はれちや男前が下がると思つて、俺等を亡きものにさへすれば如何な事も出来ると思つて、あんな悪徳無道の事をしたのらう。さア之から後追駈け生首を引抜き、千草姫の前で赤恥をかゝせにや腹が癒えないワ。千草姫だつて、彼んなヒヨットコ男に心からラブしてゐるさうな筈が無い。屹度懐のお金を捲き上げられたら頭から青涙を垂れかけられるか、翠丸をギューツと締めつけられてフンのびる位が關の山だらうよ、ウツフ、、、」

コオロ「兎も角こんな所で小田原評定やつた所で、はじまらんぢやないか、さア之から彼奴の後追つて仇討ちと出かけやう」

コブライ「後追かけやうと云つたつて、何方に逃げたか分らぬぢやないか」

オロコ「ナニ、この木の端切れを道の真中に突つ立て、倒けた方に行つて見やう。屹度

そつちに居ると云ふ事だ」

コブライ「そら、さうかも知れんのう」

と云ひ乍ら木片を拾ひ眞直に立て、離して見た。木片は南へバタリと倒れた。之より兩人は月夜の道を南へくゞと駆けて行く。

兩人「神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

世の過ちは宜り直せ

なきと教ふる三五の

神の教は聞きつれど

さうしても見直し宜り直し

聞直しさへ出来ぬ奴

世界に一つ見つかった

泥棒上りの玄眞坊

オーラの山に立籠もり

山子企んで失敗し

又も其邊をうろついて

人を苦しめ女をば

惱ませ来る悪僧奴

危い命を助けられ

落した金迄吾々に

掘つて貰つて其恩を

仇で報うた曲津神

何處へ失せたか知らね共

草を分けても尋ね出し

恨を晴らさには措くものか

神が此世にゐますなら

屹度善悪立別けて

玄眞坊の曲神を

懲し戒め給ふべし

とは云ふもの、吾々は

御氣の長い神さんの

御罰のあたる時を待つ

餘裕は此も身に持たぬ

一時も早く玄眞の

生首引抜き仇をば

打たねば男の意地立たぬ

ア、憎らしやく

不俱戴天の仇敵

定めて之から兩人は

四方八方に駆け廻り

彼の在所を尋ね出し

命を取らいで措くものか

ア、憎らしやく

泥棒上りの玄眞坊

命を取らいで措くものか

ア、憎らしやく

一寸刻か五分試し

骨も頭も粉にして

喰はねば虫が承知せぬ

ア、腹が立つく

今度の恨を晴らさねば

死んでも死ねぬ吾心

憐み給へ自在天

大國彦の御前に

真心籠めて願ぎ奉る

旭は照ることも曇る共

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

仇を討たねば措くものか

悪逆無道の玄眞坊

何處の果に潜むとも

神の力と吾々の

熱心力に尋ね出し

彼が所持する黄金を

スツカリ此方へ引奪り

最初の目的達成し

男を立てねば措くものか

あゝ、惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と云ひ乍ら蛙の行列向ふ見ずに形許りの細道を南へくゞ走つて行く。遙の前方にコン

モリとした山蔭が見える。二人は芝生の上にドツカと尻を据ゑ、

コオロ「オイ、兄貴、行途も無しに走つて居つた所で腹は空る、足は疲れる、如何する事も出来んぢやないか、一つ此處で考へて見やうぢやないか」

コブライ「やア、もう、俺もコンバスが動かなくなつて來たのだ。仇の所在も分らないのに此廣い田圃を走つた所で雲を掴む様な話だ。思へば、馬鹿らしいぢやないか。俺等は斯う南へくゞ走つてゐるのに、彼奴等は反對に北へくゞ走つた筈すれば、きばれば、きばる程遠く道理だ、此奴ア一つ考へねばなるまいぞ」

コオロ「それでも杖占をやつたら南へ倒けたぢやないか。我々は南へ走るより仕方はないのだ。ア、斯うなるに犬が恨めしい哩。俺が若し犬だつたら、彼奴の行つた後を嗅付けるんだけさ、此人間様の鼻ぢやカラツキシ駄目ぢやからのう」

二人は斯く話し乍らグツタリと弱り、眠氣さへ催し遂には原野の中で前後も白河夜船の客となつて了つた。

此處へ忽然として現はれた白衣の神人がゐる。神人は言葉靜かに

神人「汝はコブライ、コオロの兩人ではないか」

兩人一度に

兩人「ハイ、左様で御座います。貴方様は一寸お見かけ申せば、何處かの貴婦人と拜しまするが、何方へお越で御座いますか」

神人「我こそは靈鷲山に跡をたる、玉別命であるぞよ。其の方は今日迄現世に犯せし罪惡に仍つて、種々維多の神罰を受け玄眞坊、千草姫の悪人のため土中に迄埋められ、九死に一生を得乍ら、神徳の尊き事を忘れ、只一途に彼を恨み、刺つさへ懐

中の金子を奪ひ取らんぞ企んで居らうがな」

コブライ「ハイ、仰せの通りで御座います、恐れ入りました」

神人「汝等兩人、今の中に我教を聞き悔い改めざれば無間地獄に墮ちるであらう。さう

だ、今の中に玄眞坊に對する恨を打ち切り本然の誠に歸る氣はないか」

コブライ「イヤ、もう私だきて、元より悪人では御座いませんが、臍の緒の切り所が

悪かつた爲に人並の生活も出来ず、何時の間にも自ら自暴自棄となり、泥棒仲間、首を

突つ込み、悪事の有らん限りを致して來ました。同じ人間に生れ乍ら、豺狼のやう

な事をする事は私の良心に大に恥て居りますなれど、此肉体を保全する爲に止む

を得ず種々よからぬ事を企みもし、行つても來ました。さうせ私は今迄の罪業に由

つて地獄の底へ落されるものと覺悟してゐます。さうせ今から心を改めても、地獄

に墮ちるので、悪を行ふなら徹底的に惡業をやり度い決心を抱いて居ります

る」

神人「如何なる悪人と雖も、悔い改めに依つて惡は忽ち消滅し、善の方面に向ふ事が出

來るものだ。人間の肉体を持つて此地上に在る限りは絶對の善を行ふ事は出来ない

それで何事も神に任せ、神を信じ、神を愛し、日夜信仰を勵んだならば、屹度生前

死後共に安逸の生活を送る事が出来るであらう」

コブライ「ハイ、有難う御座います、如何なる神様を信仰すれば可いのでせうか。私

はこれ迄バラモン神を信じてゐましたが、一度も安心や幸福を與へられた事は御座

いません」

神人「何れの神も皆、元は天帝の御分靈、神徳に高下勝劣は無けれども、今日の世の中

は盤古神王の世も濟み、バラモン自在天の世も過ぎ去り、今はミロク大神の御世に變つてゐるのだ。それ故汝等兩人は今日より三五の大神を信じ惟神の名號を唱へ能ふる限りの善事を行はゞ屹度安逸の世を送る事が出来るであらう。夢々疑ふ事勿れ」

と宣り給ふや否や忽然として煙の如く消えさせ給ふた。兩人はフツと目を醒し、

コブライ「オイ、コオロ、お前起きたか、俺やもう大變な夢を見たよ」

コオロ「ウーン、俺も妙な夢を見たのだ。もう玄眞坊征伐は止めやうかい」

コブライ「さうだな、玄眞坊も悪いが俺も悪いから、之迄の因縁を諦めて泥棒も止め、

玄眞坊征伐も止めやうぢやないか」

コオロ「俺等ア、泥棒を止めたら喰ふ事は出来んが、之から身の振り方を如何したら可

いのかなア。實は夢の中に神様が現はれたが、餘り怖ろしうて、勿体なうて、お尋ねする事も忘れたが、之から何商賣をしたら可いのかな」

コブライ「俺等の様に泥棒の外に何も藝を知らぬ者は商賣も出来ず、學問も無し、仕方がないから修験者になつて一杖一笠の比丘になり、人の門に立つて物乞ひでもやらうぢやないか。そして三五の神様のお道を一人にでも云ひ聞かせ、死後の世界の安養淨土を開く準備をしやうぢやないか」

コオロ「兄貴お前もさう思ふか、實は俺もさう考へた所だ。さアさうと相談が定まれば兩人俄に比丘になつて印度七千餘國の靈山靈場を巡拜しやう。玄眞坊の様な惡人ですへも修験者と云ふ役徳に依つて見えず知らずの他人から、あの通り土の中へ葬られるのだ。俺等ア修験者でない爲に死骸を路傍に委棄されてゐたのだから。之を考

へて見ても神様に仕へる位結構な事はないからのう」
 茲に兩人は意を決し、別に墨染の衣も、杖も笠も無ければとも宣傳歌を口吟み乍ら、人
 里を尋ねて進み行く事となつた。

兩人「神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ

なごご教ふる三五の

神の教は日の邊り

我等が夢に現はれて

教へ給ひし神人の

御言葉こそは尊けれ

惡逆無道の限をば

盡し來りし吾々も

大慈大悲の大神の

情の言葉に目を覺まし

轉迷開悟の花咲いて

今や真人に成り初めぬ

人は神の子神の宮

珍の身魂を受け乍ら

曲津の棲處に使はれて

さうして神の御前に

復命なさん術あらん

ア、惟神 々々

神の恵みの幸はひて

吾等二人の行末は

天國淨土の花園に

安く導き給へかし

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くることも

假令大地は沈むことも

曲津の神は猛ることも

誠の力は世を救ふ

誠一つの三五の

神に従ふ吾々は

如何なる悪魔も恐れんや

虎狼や大蛇なき

一時に襲ひ來ることも

神の守護の有る限り

安く進ませ給ふべし

ア、有難しく

闇路に迷ふ盲目の

俄に兩眼打開き

日出の國の花園に

進み出でたる心地なり

ア、有難しく

神の教を聞きしより

吾卿は何となく

春駒の如勇み立ち

雲井に登る如くなり

ア、惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

元氣よく歌ひ乍ら旅の疲れも空腹の惱も打忘れスガの港の方面指て進み行く。

(大正一五・二・一 舊一四・二・一九 於月光閣 北村隆光録)

瑞 月

白妙の衣の袖は濡れにけり

神の恵みの深きをおもひて

迫り來るこの世のなやみ教はんこ

泪に袖をしほる永年

第一八章 金

妻 (一八〇七)

大日山の麓の森林に大日如来を祭つた古ぼけた祠がある。其祠の中には墓の鳴き損ねたやうな面構へをした玄真坊と、天つ乙女のやうな氣高い姿の千草の高姫と云ふ美人の二人が、無遠慮に寝そべつて互に頼杖をつき乍ら囁いて居る。

玄真坊 「オイ、女房」

千草姫 「厭ですよ女房なんて」

玄真坊 「そんなら妻にしておこう。オイ妻」

千草姫 「妻なんてつまらんぢやありませんか。もつと高尚な名を呼んで下さいな」

玄真坊 「そんなら細君にしておこうか、それが嫌なら御内儀にしておこうか」

千草姫 「妻君だの内儀だの女房扱ひは眞平御免ですよ」

玄真坊 「それや約束が違ふ、お前は俺の嫁になるに云つたぢやないか」

千草姫 「そりや云ひましたとも、あの時はあの時の場合で仕方なしに云つたのですよ。

一生女房になると約束は爲しませんからなア。假令半時でも女房になつて上げたら光

榮でせう」

玄真坊 「そいつは頼りないなア、一生俺の女房になつてくれないか」

千草姫 「そりやならない事はありませんが、貴方の心が心ですもの。そんな水臭いお方

に一生を任して堪りますか」

玄真坊 「今日會つたばかりで水臭いのからいひよそんな事が分るものか、そりやお前の

邪推だらう」

千草姫「それだつて貴方は本當に水臭いワ。澤山の黄金を所持し乍ら、女房の私に任して下さらないのですもの。女房は家の會計萬端をやつて行かなければならんぢやありませんか、金無しに如何して會計をやつて行く事が出来ますか、よう考へて御覽なさい」

玄真坊「そりやそうだ、だがまだ斯うして旅の空ぢやないか、こんな重い物を女房のお前に持しては氣の毒だ。家を持つた上でお前に支出萬端任すから、まア／＼安心してくれ給へ」

千草姫「貴方はさこ迄も私を疑つてゐらつしやるのですな。私だつて人間ですもの、金位持つたつて途中で屁古垂れるやうな弱い女ぢやありませんよ。さアすつぱりと此方へお渡しなさい。命迄拾つて上げた私ぢやありませんか。假令夫婦でなくても命

を拾つてあげた恩人ぢやありませんか」

玄真坊「そりやそうだ、お前のお世話になつた事はよく覚えて居る。併し乍ら一夜の枕も交さん中からさう氣ゆるしは出来ないからなア」

千草姫「何しまア下劣な事を仰有いますな。それ程貴方はお金に執着心が強いのですか」

玄真坊「別に金に執着は無いがお金と云ふものは物品の交換券だから、神様に次いで大切にせなければならぬものだ。小判の百兩も出せばぎんな美人でも自分の女房に買ふ事が出来るのだ。これ丈の金があれば、何處かの都で高歩貸しをして居つても一生安樂に暮す事が出来るからな」

千草姫「ヘン馬鹿にして貰ひますまいかい、遊女と一つに見られては第一盛國の天人も

つまりませんワ。そんな分らぬお前さんならこれで御免を蒙りませう。誰がこんなヒヨットコ野郎に秋波を送り女房だの嫌だの云はれて耐るものか、左様なら、これ迄の御縁だに諦めて下さい」

と、ツト立ち上り歸ろうとする。玄真坊は慌て、千草姫の腰をぐつと抱へ

玄真坊「でも、柔い肌だなア。これそう短氣を起すものぢやない。魚心あれば水心あり

俺だつて木石ならぬ血の通ふた人間だ。そんなら三分の一だけお前に渡しておくか

ら、暫くそれで辛抱してくれないか。三分の一だつてザツと一萬兩あるのだからな

ア、初めから全部ほつたくろうとは餘り虫がよすぎるぢやないか」

千草姫はベロリと舌を出し乍ら、

千草姫「玄真さん人を見損いして下さいますな。私はお金に惚て貴方に跟いて来たのち

やありませんよ。エ、汚らはしい。金等は水臭いワ、金が仇の世の中云ひますか

らナ、そこ迄お心が分つた以上は金なんか要りません。貴方が持つて居て下されば

私の要る時には出して下さるんだから、そんな重い物はよう持ちませんワ」

玄真坊「なる程お前の真心は能う分つた。そんな心なら全部任かしてもよい、サア重く

て濟まんがお前の腰につけてやろう」

千草姫「嫌ですよ、そんな重い物……。男はんが持つものですよ。女なんか重たくて旅

も出来ませんもの」

千草姫は或地點迄重たいものを玄真坊に持たせ、此處云ふ所で翠丸を締めて強奪ろ

うと云ふ企をもつて居た。戀に惚けた玄真坊は、千草姫の心の奥の企も知らず茹蛇

のやうになつて、低い鼻や尖つた口や、ひんがら目を一所に寄せ聲の色迄變へ

玄真坊「道は千草姫だ。偉い、俺もコックリと感心した。さアこう定まつた以上はお前はさこ迄も私の女房だなア」

千草姫「そうですとも、今更そんな事云ふだけ野暮ですワ。初から女房と定つゝるぢやありませんか」

玄真坊「それでも最前のやうに暫くの女房だの、一生女房になろうとは云は無かつたの
と云はれると困る。一生なら一生とハッキリ云ふてくれ、金のある中だけの女房で
は困るからもう」

千草姫「これ玄真さん、そんな下劣な事を云ふて下さいますな。二つ目には金々々仰有
るが、金なんか人間の持つものですよ。私の美貌と天賦は他には御座いますまい。
天下に唯一人の救世主と云ひ、美人と云ひさうして金銭づくで手に入りますか、よ

く考へて御覽なさい。妾は金が慾しけりやトルマン國の王妃ですもの、幾何でも持
つて来るんです。お前さんは泥棒の親分をやつて居たのだから、人の金を奪ふ事許
り考へて居たのだから、女房が金を奪ふか、とそんな事許り考へて居られるのだ
からそれが私は残念です。もう少し人格を向上して貰はなくては、大ミロクの添柱と
云ふ所には行きませんよ」

玄真坊「いやもう恐れ入つた。今後は一切お前さんにお任せ申す。いや女房に一任する
併し乍ら何時迄もこんな所で二人がコソコソ話しをやつても芽のふく時節がない。
何所かスガの里へでも飛び出して立派な家屋を買求め、それを根據として天下統一
の大業を計劃せうぢやないか」

千草姫「ホ、ホ、小さい男にも似ず、随分肝玉の太い男だこと。妾それが第一氣に入

つてよ。さアこれからお前さんは言觸れとなつて、そこから界限を廻つて下さい。私は救世主となつて、この大日山の奥深く社を建て、其處に控へて居りますから、ドシ／＼と思夫愚婦を集めて來るんですよ」

玄真坊「ヤアそれも一策だが俺の顔は大抵の奴がこの界限では知つて居る。万一オーラ山の山子坊主だも悟られては折角の計劃が露所に歸するから、そんな事云はずに、ガの里迄行かうぢやないか。兎に角この風体では仕方がない、相當な法服を誂へ身につけて行かねば人が信用せんからのう」

千草姫「そんなら兎に角夫殿の仰に任せスガの里迄参りませう」
彌々これより玄真坊、千草の高姫は、大日の森を立ち出で、スガの港をさして大陰謀を企てんと進み行く事となつた。玄真坊は先づ歌ふ。

玄真坊

「出た／＼／＼／＼現はれた 雲井の空から現はれた

月日は照るども曇るども 假令大地は沈むども

此世を救ふ生神は 今現はれた千草姫

それに付き添ふ天真坊 この二柱ある限り

世は常暗と下るども 案じも要らぬ法の船

ミロク菩薩が棹さして 浮瀬に沈む人草を

彼方の岸にやす／＼と 救ひ助けて安國と

治めたまはいる時は來ぬ 勇めよく／＼諸人よ

祝へよく／＼千草姫 千草の高姫ある限り

此世は末代潰りやせぬ 三五教の奴原は

金 妻

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

等と業詔並べたて

世間の愚民を迷はせる

口先計りの山子神

こんな奴等が何千人

出て来た處で何になる

有害無益の厄介ものよ

倒せよ／＼三五の

神の教の宣傳使

齋苑の館を根底から

デングリ返してやらなけりや

我等の望みは達せない

ウラナイ教の大教主

千草の高姫此所に在り

仰けよ／＼諸人よ

慕ひまつれよ國人よ

命の清水が汲みたくば

天眞坊の前に來よ

天帝の化身名のりたる

第一靈國天人の

内流うけたるこの身靈

またと世界に二人ない

それに加へて此度は

天より下りし千草姫

凡ての權利を手に握り

天降りたる月の國

天國淨土に開かんこ

宣せ給ひし尊さよ

ア、惟神々々

恩頼がうけたくば

天眞坊の前に來よ

天眞坊が取り次いで

千草の姫の御前に

事も委曲に奏上し

如何なる罪をも穢をも

早川の瀬に流し捨て

天國淨土の樂みを

此世ながらに授くべし

下つ岩根の大ミロク

神の教の太柱

彌々現はれました上は

四方の民草一人も

ツツボに墜とさぬ御誓

喜び勇めよ國人よ

ア、惟神々々

御靈幸倍ませよ

玄真坊 「もし千草姫さん、いや女房殿、この宣傳歌はお氣に召しましたかなア」

千草姫 「ホ、、、、道は玄真坊様だけあつて、甘く即席によい文句が出ますこと、私

も大に感じ入りましたよ。さうかこの調子で町へ出たら力一ばい歌つて下されや」

玄真坊 「よし／＼、歌つてやろう、其代りお前も俺の女房だから、俺の歌も作つて歌つ

てくれるだらうなア」

千草姫 「そりや、玄真さん、天地顛倒も甚だしいぢやありませんか、神界の御用と現界

の御用と混同してはいけませんよ。神界となればこの千草姫が大ミロクの太柱、玄

真さんは眷族も同様ですよ。肉体上からこそ夫よ妻よと云ふて居りますが、神界の

事となつたら此の千草の高姫は一步も譲りませんからなア」

玄真坊 「大變な權幕だなア。恰で大日山の山の神様見たやうだワイ」

千草姫 「そりやそうですとも、大日山の山の神は私ですよ。それだから嫁天下の女房を

山の神と云ひませうがな」

玄真坊 「なる程、お前の云ふ通り俺の聞く通りだ、フ、、、」

千草姫 「玄真さん、も一遍今の歌を歌つて頂戴な」

玄真坊 「よし／＼歌はん事はないが、何だか女房の讚美歌を歌ふのは些つと計りてれ

臭いやうな氣がして困るがなア」

金

妻

三二九

千草姫「エ、頭の悪い、女房の讚美歌ぢやありませんよ。下つ岩根の大ミロクさんの讚美歌を歌つて下さいと云ふのですがな」

玄真坊「ウン／＼そりや分つて居る。よし／＼そんなら慎んで歌はして頂きませう。オイ併し乍らスガの里迄はもう十五六里あるから到底足が續かない。この向に入江村と云ふ所がある。其所はハルの海がズツと入り込で居る處で、大變景色も佳い。其所の宿で今晚は宿つたら如何だろうか」

千草姫「里程は其所迄幾何程ありませうかな」

玄真坊「三里半計りある。そこ迄行つておけば明日は船で樂に行けるからなア」

千草姫「成程そりやよい事を思ひ付いて下さつた。さア、之から入江の里迄急ぎませう」

二人は足に燃をかけ、一生懸命に駆け出した。

(大正一五・二・一 舊一四・二・一九 於月光閣 加藤明子録)

瑞 月

岸を打つ波の音にも魂を

こめてし聞けば神の聲あり

繪に歌に神の教をまつぶさに

ささせきくみこる人は少なし

きくらげの耳持つ闇の世の人に

御宣傳へんことのかたさよ

第一九章 角兵衛獅子 (二八〇八)

入江の里の瀨屋の奥の間には例の玄真坊、千草の高姫の二人が爲す事も無く、意茶々々云ひ乍ら十日許り逗留して居る。

千草姫「モシ玄真さん、この宿へ泊つてから今日で十日許りにもなりますが、餘り退屈で仕方がないぢやありませんか。ハルの湖で有名な日高山はモウ見えなくなりまして、真帆片帆の行交ひも昔とは餘程淋しくなつたやうです。何とか一つ歌でも詠んで楽しもうぢやありませんか」

玄真坊「別に無聊に苦まなくても、お前と俺と二人居りさへすれば、如何な快樂でも出来るのだが、お客様だとか、お月様だとか文句を云つて應じないものだから、元い

らすの快樂を棒に振つて自分が自分で苦んでゐるのだ。俺やモウ、オチコがコテノでやりきれないッ」

千草姫「ホ、、、、何とした、玄真さんは粹な方だらう、本當に恨めしいのはお客様さんだワ。お客様さんさへなけりや、玄真さんの御機嫌を十分に取れるんだけれいなア」

玄真坊「一体、お月さんといふものは永くて一週間早くて三日位なもんだと聞いてゐるに、お前はモウ十日にもなるぢやないか、チト可笑しい容態だなア」

千草姫「そろそろです共、第一靈國の天人ですもの。當然の人間なら月に七日の穢れで済みませんが、妾は一年中のを一週に片付けるものですから、十二ヶ月分合せて八十四日間月經があるのですもの」

玄真坊「そう永らくの間、俺も待ち切れなワ。さうだ、一つ思ひ切つて奸淫をやるうでないか、所謂それが月經奸だ、ア、ーン」

千草姫「ホ、、、助平野郎だここ。龍女を犯してさへも七生浮ばれないと云ふのに況して天人の月經奸を冒すやうな馬鹿な人が世間に在りますか、七生八生はおろか百万生まで罰をうけますぞや」

玄真坊「何ミか願ひ下けて貰へんもんかいナ、八十四日の二分の一位に忪へて貰へそ
うなもんだナ。世はまじないといふから、それでも差支あるまい。神さんだつてそんな野暮なこた仰有るまいからのう」

千草姫「玄真さん、モウそんな話はやめて下さい。私地獄へ墜ち相な氣分が致しますワそれより歌でもアツサリ詠まうちやありませぬか……」

千草姫「添はまほし君の手枕ほりすれど」

月の障にせんすべもなし。

ほし／＼星は御空に輝けど

月の障に影うすれ行く。

玄真の君の頭に月照りて

影さしにけり御山の谷は」

玄真坊「オイ冷かすない、御山の谷は眞赤けだろ。紅葉が照つてるだろ、さうか一つ

紅葉狩をして貰いたいナア」

千草姫「玄真さん、イヤですよ、スカンたらしい」

といひ乍ら、蝟禿頭をビシャ／＼ツミ細い手でやつた。玄真は目も鼻も口も一所へ巾着

をすほめたやうに集めて了し、

玄真坊「エツへ、、、コリヤ、千草、無茶するないヤイ、俺の頭にもヤツバリ血が通ふてゐるぞよ」

千草姫「餘り藥鐘がたぎつて居つたので、手のひらをやけどしましたよ。さうか玄真さん水を汲んで来て下さい、手を冷しますから……」

玄真坊「夫の頭の温みがお前の手に残つてゐるのも可から、まア楽しんで待つて居れ、そう永く温みが止つて居るものでないからの」

千草姫「自惚も可い加減になさいます。藥鐘頭の汗脂が手について、氣味が悪うてならんから水を汲んで来て下さいと云ふのですよ」

玄真坊「エー仕方のない山の神だなア」

と云ひ乍ら自分が立つて井戸水を汲み來り、

玄真坊「サ、山の神さん、否々ミロクの太柱さま、さうぞお手を御洗ひ下さいませ」

千草姫「善哉々々」

と云ひ乍ら、金盥の水で手を洗ひ、

千草姫「ヤ、玄真坊、御苦勞であつた、褒美には此水を遣はすによつて、一滴も残らず妾が前で呑んだが可からうぞや。決して千草姫の手垢ではない、其方の藥鐘頭の汗脂だによつて、喜んで頂戴召されよ」

玄真坊「オイ、嬾、女房イヤ……千草の太柱、馬鹿にすない、俺を一体何方で心得てるのだ。之でもお前の夫ぢやないか」

千草姫「オット任せで食へ込んだ夫ですもの、縦から見ても横から見ても、オットまし

いスタイルだワ」

斯くいちやついてる所へ、表の街道騒がしく、太鼓を打鳴らし乍ら、角半衛獅子がやつて来た。

宿屋の亭主は二人の居間に恐る／＼出で来り

亭主「モシお客様、大變御退屈と見えますが、今あの通り、門口へ角兵衛獅子がやつて来ました。一つお舞はしになつたら如何ですか。お氣晴しには大變面白う御座いますよ」

玄真坊「やア、それは有難い、さうか姫神さまの御上覽に入れてくれ、……若しミロクの太柱様、角兵衛獅子は如何で御座いますかな」

千草姫はワザミすました面で、

千草姫「善哉々々、所望だ／＼」

亭主「ハイ畏まりました御座います、直様此處へ連れ参ります」

と云ひ乍ら表へ出で、行く。少時するに小さい獅子舞を被つた男と、深編笠を被つた太鼓打がやつて来た。

玄真坊「ヤア、御苦勞々々、遠慮は要らぬ。此座敷へ上つて一つ舞つてくれ、此頃はミロク様の御機嫌が悪くて困つてる所だ。さうか神樂舞でもやつて岩戸開をやらなくちや俺も實ア紅葉の盛りで困つてゐるのだ」

角兵衛獅子は軽く目禮し乍ら、座敷に飛び上り、一方は唄ひ、一方は舞ひ出した。

角兵衛獅子「テテンコテン／＼　テテンコ／＼　テテンコテン／＼

テテンコ　テン／＼　テテンコテン　角兵衛獅子

角兵衛獅子

一月元旦夜が明けりや

兄は十一弟は七つ

去年舞ふた此町で

今年もやつぱり角兵衛獅子

テテンコテンく

テテンコくテテンコテンく

テテンコテンくテテンコテン 角兵衛獅子

一月元旦夜が明けた

兄は太鼓で弟は踊る

お國戀しや角兵衛獅子

太鼓の音で日が暮れる

テテンコテン テテンコテン テテンコくテテンコテンく

テテンコテンくテテンコテン 角兵衛獅子

玄真坊「あア妙々、サ、褒美に之をやる」

と云ひ乍ら、小判を一枚おつ放り出した。角兵衛獅子二人は喜んで、頭に被つてゐた獅子

子や編笠を除つて見るに、豈計らんや玄真坊が千草姫と二人、澤山な座布團の上にバイの化物然と控えてゐる。

角兵衛獅子「ヤ、汝は玄真坊だな、よい所で見付けた。俺等二人を計略にかけ、生理に

しやがつた悪人原だ、俺は夢の中に神様の教を戴いて、最早汝に復讐の念は絶つて

ゐたが、かうして二人が夫婦然とすましてゐる所を見るに了見がならない。オイ、

コオロ、汝早く役所へ訴へて来い。俺は逃げない様に番をしてゐるから……」

コオロ「ヨシ来た合點だ」

とコオロは逸早く表へ飛び出して了つた。玄真坊はガタく慄び出し、

玄真坊「ヤ、千草姫如何せうかな、こころしては居れまい、俺も汝も首が飛んで了ふがナ

……」

コブライ「コラ當然だ、玄真坊思ひ知つたか、今に捕手の役人にフン縛られ笠の臺が飛ぶのだ。それを見乍ら、俺は一杯飲むのがせめてもの腹いせだ、イツヒ、ウツフ、とても儲も心地よいこつたワイ」

玄真坊「オイ、コブライ、一萬兩金をやるから、願下げしてくれまいか、角兵衛獅子に歩いて、も一萬兩は仲々儲からないぞよ」

コブライ「馬鹿云ふない、そんな事出来るものか。既に已にコオロが訴へ出てるぢやないか、モウ観念せい、仕方がないワ」

千草姫「ホ、、、あの玄真さんの胸震ひの可笑しさ、其態ア一体何ぢやいな。コレく、奴さん、お前を生埋にしたのは此玄真さんだぞえ、千草姫は少しも興り知らない處だからそう思つて下さいや」

コブライ「命の親の姫様に對し、毛頭恨を持つて居りませぬ。そして又貴女様を訴へるやうな事は決して致しませぬから、さうか御安心下さいませ」

玄真坊は色着ざめ、ガタ／＼慄をやつてゐる。千草姫は側近く寄りそひ、

千草姫「コレ玄真さん、確りしなさらんかいナ、月の國を手に握らうと云ふ如うな大膽な計畫をするお前さんが、捕手位に震ふと云ふ事があるものか、神力を以て吹飛ばして了へば可いぢやありませんか」

と云ひ乍ら、オチコの下にブラ下つてゐる光のない二つの玉を力限りに握りしめた。玄真坊は虚空を掴んで其場に「ウーン」と云つたきり倒れて了つた。表の方には捕手の役人を見えて、ザワ／＼と足音が聞えて來た。コブライは役人出迎への心持にて、慌て、表へぬけ出す。其間に千草姫は玄真坊の胸巻をすつかりと外し、自分の腰に捲き表二階

の間へ素知らぬ面して納まり返つてゐた。十二三人の捕手の役人、コオロ、コブライ及亭主の案内にて此間に出で来り、玄真坊の倒れてゐるのを見て

捕手「ヤ、此奴、モウ舌でもかんで自害したと見え絆切れてゐる。こんな者はモウ仕方がない。亭主、其方に此死骸を渡して置くから、何處の野邊へでも捨て、置くがよからう」

と云ひ残し、逸早く出で、行く。

千草姫は一間に入つて二階の障子の破れ穴から離棟の座敷を眺めて見ると、亭主や出入の者が玄真坊の死体を戸板に乗せてワイ／＼と云ひ乍ら、何處へ擔ぎ行く姿が見える。千草姫は胸をヤツと撫でおろし、

千草姫「南無頼生玄真坊菩提の爲、歸命頂禮謹請再拜、ホ、、、これでも妾の寸志

の手向、玄真坊の亡靈殿、安樂に成佛致したがよからうぞや。到頭三萬兩の金を手ぬらさずで、ほつたくつてやつた。サ、之さへあれば大丈夫、一つきつか景勝の地を選んで大建築をなし、人目を驚かし、ウラナイ教の本山を建て、三五教を根底から覆へし、ミロクの太柱の名聲を天下に輝かませう。てもさても都合の好い時には都合の好いものだなア」

とホクッ笑んでゐる。障子の外から破鐘のやうな聲で、

李助「ワツハ、ウツフ、天晴々々、千草の高姫の御腕前は李助確に見届けたぞや」
千草の高姫は李助の聲に打驚き、日頃戀慕ふ李助様が此宿に泊つて御座つたか。お、恥しや、白粉も付けねばなろうまい、紅もさ、ねばなるまい、髪も結び直し、身繕ひせにやならぬと、

千草姫「モシ、左助さま、お察しの通り千草の高姫で御座います。さうぞ少時こゝを開けない如うにして下さいませ。一寸身だしなみをして、それからお目にかゝりますから」

妖幻坊の左助はワザミに、すねた如うな口振で、

妖幻坊「あ、左様で御座るか、會つてやらんご仰有れば、たつて會つて貰ひたいと思

はぬ。さよなら。拙者は曲輪城へ雲に乗り立ち歸るで御座らう」

千草姫「モシ、左助さま、お情ない、憧れ慕ふて居る女房を一目も見ずに捨て、歸らう

ごは餘りぢや御座いませぬか。貴方に別れて此方、寢ても醒ても會ひたい、と思ひ慕して居りました。何卒只今の御不禮はお許し下さいまして、一目會ふて下さいませ」

妖幻坊「左様ならば、御免を蒙つて、久し振りで高ちやんの綺麗なお面を拜見しやうかな」

と云ひ乍ら二階の床をメキ、いはせ乍ら無雜作に障子を引開け、ノソリノソリ入り来り千草の前にドッカミ座を占め、ごんぐり眼を剥き出して、ニコノ笑ひ乍ら、

妖幻坊「ヤア、高ちやん、餘程若くなつたぢやないか、高宮姫時代はまだ三つも四つも若く見えるよ、先づ、壯健でお目出度う」

千草姫「モシ、左助さま、貴下何處をさう彷徨いてゐらつしやつたの。私され丈尋ねて居たか知れませぬよ。今年で三年許り會はぬぢやありませんか」

妖幻坊「俺だとしてお前の在處を捜し求めて、こんな所迄やつて來たのだ。ウラナイの神様のお蔭に依つて、計らずも此宿屋でお前に遇ふたのは何よりの仕合せ。ヤ、俺も

嬉しい、サ、今夜はシッポリと昔語でもして休まうぢやないか」

千草姫「こんな嬉しい事はメツタに御座いませぬ。貴方何がお好で御座いましたいな、何か差上げたいと存じますが……」

妖幻坊

「ヤ、俺は別に何が好いふ事もない。好なのはお前の面許りだよ、アツハ、

千草姫

「そうく、貴方は、一番好なは私の面、一番嫌ひなのは犬だと仰有いましたね」

妖幻坊

「ゴリーヤ、高宮姫、モウ犬の事は云つてくれな。實の處は入江の里までやつて来た所、澤山な犬に吠つかれ、氣分が悪くて堪らず、今日で三日許り此宿屋に泊つてゐるのだ。お前は裏の座敷で、何かい、男を喰ひ込んで居つたやうだが、それと思ふと、何だか妬けて仕方ないワ」

千草姫

「ホ、、、彼奴ア、オーラ山と云ふ山に砦を構へて、泥坊の張本人をやつて居たを眞坊と云ふ賣僧ですよ。彼奴が懐に澤山な金を持つてると知り、甘く言ひくゝめて此宿屋へ連れ込み、ウマく、三萬兩をフン奪つてやつたのです。戀の色の誰があんな禿蝟土瓶に相手になるのですか、よう考へて下さいナ」

妖幻坊

「そらそうだらう、杓ちやんといふ色男を夫に持ち乍ら、あの如うなヒョットコに相手になるお前では無い……こは承知して居るもの、三年も別れて居ると、心がひがんで妙な氣になるものだ。ヤ、無實の罪をお前に着せて濟まなかつた、これ此通りだ」

と両手を合せて床に頭をすりつける。千草姫は

千草姫「モシ杓ちやん、厭ですよ、擲擲も可い加減にして置いて下さい。私、貴方の仕

「打が餘り水臭くつて憎らしいワ」

妖幻坊「幾らお前が憎らしいと云つても繋る縁ぢや仕方がないワ。俺も惚れた弱味でお前にや百歩を譲らざるを得ないワ、ハ、、男と云ふ奴、女にかけたら脆いものだワ、アハ、、」

千草姫「ヨウマア憎たらしい、そんな冗談が言へますこと。私や却て恨めしう御座います。サ、久し振りで今晚はゆつくり寝まうぢや御座いませぬか」

妖幻坊「お前は第一靈國の天人、底津岩根の大ミロクさんの靈で八十四日間月經がある

と云ふぢやないか、一緒に寝るこた、眞平御免を蒙つて置かうかい」

千草姫「エー憎たらしい、貴方はあの賣僧坊主の話をきつからか聞いてゐらつしやつたのでせう。腹の悪い方ですね、何處で聞いてゐたのです」

妖幻坊「ウン、雪隠の中で、……ウン、イヤ／＼雪隠へ行かうと思つて一寸横を通つた

處、餘りお前によつた聲がするので、立ち聞をするにそんな事を云つて居たよ。

ヨモヤお前は氣が付かぬものだから、自分の居間へ返つて……あんな美人があつたらなア……と羨望に堪へなかつたのだ。まア／＼お前で結構だつた」

千草姫「月經なんかあらしませんよ、安心して寝んで下さいな」

妖幻坊「ヨーシ、面白い。そんなら久し振りで高ちやんの、お寝間の伽でもさして頂きませうか」

千草姫はプリント春を向け、

千草姫「知りません、勝手になさいませ」

と子供の如うなスタイルで稍すね氣味になつてゐる。猛犬の聲はワン／＼／＼と四方八

方より聞え来る。

(大正一五・二・一 舊一四・二・一九 於月光閣 松村眞澄錄)

瑞 月

月さかき嚴の御魂の御光に

常世の闇も晴れ渡るなり

さしのほる朝日に露の消ゆるら

年を重ねてほろぶ曲教

榮えゆく神の御園に生れ來て

滅びの道を辿るまがかな

第二〇章 困

客 (二八〇九)

瑞魂の大神が

勅命を畏みフサの國

ウブスナ山の靈場ゆ

月の神國に蟠まる

大黒主の惡身魂

言向和し天國の

神園に救ひ助けんこ

照國別の宣傳使

一行四人は河鹿山

烈しき風に吹かれつゝ

祠の森や山口や

怪しの森を乗り越えて

彼方此方と駆けめぐり

神の誠の御教を

國人達に宣り傳へ

病めるを癒し貧しきを

困 客

三四三

救ひ助けて今此所に

百の神業仕へつゝ

トルマン國の危難をば

救ひて此所迄來りけり

あゝ惟神々々

神の身魂の幸ひて

吾等が使命を詳細に

遂げさせ玉へご願ぎ奉る

大日は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くる共

假令大地は沈むとも

曲津の神は猛ぶとも

誠の神の御力

吾身に浴びし其上は

如何なる曲も恐れんや

進めや進めいざ進め

吾等は神の子神の宮

虎狼や獅子熊や

鬼や大蛇の曲神が

如何程猛り狂ふとも

何か恐れん敷島の

大和男子の宣傳使

勝利の都に至る迄

いつかな怯ぬ雄心の

大和心を振り起し

進みて行かん大野原

地獄は忽ち天國と

吾言靈に宜り直し

上は王侯貴人より

下崩陀羅に至るまで

神の救ひの手を伸べて

一蓮托生救ひ上げ

瑞の靈の神力を

現はしまつる吾使命

遂げさせ玉へ惟神

皇大神の御前に

畏みく願ぎ奉る

三千世界の梅の花

一度に開く神の國

開いて散りて實を結ぶ

日の大神や月の神

大地を守らす荒金の

司ごゐます瑞魂

神素盞鳴の大神の

深き恵は忘れまじ

尊き勳功は忘れまじ

進めよ進めいざ進め

悪魔の砦に立向ひ

攝受の劍を抜き持ちて

言向和すは案の内

ア、勇ましやく

神の使命を身に受けし

名さへ尊き宣傳使

到る所に敵はなし

ペラモン教やウラル教

如何程及向ひ來るとも

皇大神の賜ひてし

嚴言靈の光にて

暗夜を照らし神徳を

月の御國に輝かし

照らさにやおかぬ吾使命 守らせ玉へ三願き奉る

ア、惟神々々

靈幸ひましますよ」

斯く歌ひ乍ら入江の村近き田圃道まで、やつて來たのは照國別、照公、梅公別の三人であつた。

照公「モシ、先生、モウ日も暮れ近くなりましたが今晚は入江の村で宿をとり、緩り

休息を致しまして、明日は船でスガの港へ行かうぢやありませんか」

照國別「成程、大分に疲れたやうだ、先づ此所で一服しやう。モウあの村へは遠くはあ
るまいから」

梅公別「先生、今晚は是非入江村で泊りませう。濱屋と云ふ景色よい宿屋が御座います
から是非そこへ泊つて、明日スガの港に着く事に致しませう。スガの港にはアリス

と云ふ藥屋の長者がひりまして、その息子には、イルク、娘にはダリヤ姫と云ふ熱心な三五教の信者が居ります。キツト待つて居るに違ひありませんから」

照國別「そうだ、梅公別さんは一度お泊りになつた事があるさうだから、心安くてよからう」

照公「四方入方の景色を遠く見渡せば

コバルト色に遠山かすむ」

照國別「薄曇にほかしたやうな山影は

スガの里なる高山ならん」

梅公別「夏草の生ひ茂りたる廣野原

進み行く身の楽しくもある哉。

今日の日も早や暮れん草枕

旅の疲れを癒す宿かな」

三人が休んでゐる後の草の中から何だか、ウン／＼と呻り聲が聞えて来る。梅公別は耳敏くも之を聞き、ツカ／＼と叢の中の呻き聲を尋ねて近づき見れば、醜い賤しい面をした坊主が一人半死半生の態で倒れて居る。梅公別は直様天の數歌を奏上するや、倒れ人はムク／＼と起き上り、

倒れ人「何方か知りませんが、よくまア助けて下さいました。拙僧はバラモン教の修験者で天真坊と申します」

梅公別は、きこか見覺えのある顔だなア……とよく／＼念入りに調べて見ると、オーラ山に立籠つて大望を企んでゐた妖僧の天真坊なる事を知り、

梅公別「やアお前は女眞坊ぢやないか。オーラ山で改心をするに云ひ乍ら、再び惡に復つて三百の手下を引率れ、各地に押入強盜をやつて居ると云ふ噂であつたが、天罰は恐ろしいものだ。何人に、お前は虐げられて、こんな所へ倒れて居たのだ。察する處持前のデレ根性を起し、女に一物を締つけられ、息の根の止まつたのを幸ひかやうな淋しき原野に遺棄されたのだらう、扱もく憐れな代物だな」

玄真坊「これはく恐れ入りました。私はお察しの通り、女に罌丸を締めつけられ、三万兩の金をほつたぐられ、かやうな所へ、ほかされたもので御座います。只今限り惡事は止めます。さうして女等には、キツト今後目をくれませんか、何卒私をお荷物持にでも構ひません、お伴に連れて行つて下さいませんか」

梅公別「やア、俺にはお師匠様がある。俺一人の一量見では如何する事も出来ぬ。先づ

お師匠様の御意見を聞いた上の事にしやう」

照國別は最前から二人の問答を聞き終り様子を知つて居るので、梅公別の言葉も待たず

照國別

「ヤ、玄真坊とやら、最早や日の暮にも近いから、緩りと宿屋にでも行つて話を

承はらう。之から吾々は入江村の濱屋旅館に一泊するつもりだ。お前も一緒に行

かうぢやないか」

玄真坊

「へ、何と仰有います、濱屋旅館にお泊りで御座いますか。あの家はお客があま

り澤山で、ささくつてゐますから、少し景色は悪う御座いますが、玉屋と云ふ立派な宿屋がありますから、其處へお泊りになつては如何で御座いませう。私もお伴をさせて頂きますから」

梅公別「ヤ、一日濱屋旅館と相談が定つた上は是非とも濱屋に行かう。吾々の精靈は已

に濱屋に納まつて居るのだから」

玄真坊「そら、さうで御座いませうが、ならう事なら待遇もよし、夜具も上等なり、家も新しう御座いますから、玉屋になさつたら如何で御座いませうかな」

梅公別「ハ、、、、此男は十日許り濱屋旅館に泊つてゐたのだらう。其後獅子に小びさくこみ割られ、捕手にフン込まれた鬼門の場所だから、濱屋は厭だらう。ヤ、それは無理もない、然し吾々がついてゐる以上は大丈夫だ。ソツと後から跟いて来いお前の身柄は引受けてやるから、その代り今迄のやうな心では一日だつて安心に世を暮す事は出来んぞ。心の底から悔い改めるか、さうぢや」

玄真坊「ハイ、生れ赤子になつてお仕へ致します。何卒お助け下さいませ」

梅公別「ウン、ヨシ、先生、今斯様に申してゐますが、然し乍ら此奴の悪事は芝を被

らねば直らない奴で御座いますが、私も何とかして、改心をさせて遣り度う御座いますから、お伴をさせて下さいませ。梅公別が無調法のないやうに引き受けますから」

照國別「兎も角、二三日間連れて見やう。如何してもいかなけりや、突放す迄の事だ。

さア日も暮れか、つた、急いで行かう」

と又もや聲も涼しく宣傳歌を歌ひ乍ら入江村の濱屋をさして進み行く。

濱屋の表口にごしか、るゝ客引の女が、二三人門口に立つて、

女「もしお客さん、ごちらにお出で御座います。明日の船の都合も宜しう御座いますから此方にお泊り下さいませ。十分丁寧に、待遇も致しますから。さうして、加減のい、潮湯も沸いてゐますから、何卒當家でお泊りを願ひます」

梅公別 「ヤ、お前がさう云はなくても、此方の方からお世話になり度いと思つて來たのだ。一行四人だ、よい居間があるかな」

女 「ハイ、裏に離棟が御座いまして、そのお座敷からはハルの海の鏡が居乍らに見えます。何なら二三日御逗留下さいませれば、眞帆片帆の行き交ふ景色は、まるで胡蝶が春の野邊に飛び交ふやうで御座います」

梅公別 「もし先生。さアお這入り下さい」

照國別 「そんなら御免蒙らうか」

と先に立つて繩暖簾をくゞる。女眞坊はビク／＼慄ひ乍ら、照國別の後になり小さくなつて跟いて行く。次に照公、梅公別は亭主や下女に愛嬌を振り撒き乍ら、奥の離棟に進み行く。

先づ入浴を済ませ夕食を終り、四人は浴衣がけになつて、團扇片手に罪のない話に耽つて居ると、表の二階の間に、なまめかしい聲が聞えて來る。梅公別は不思議さうに首を傾け聞いてゐる。

照公 「これ梅公別さん、何思案をして居るのだい。ありや何處の女が客とふざけて居るのだい」

梅公別 「いや、どうも合點の行かぬ聲だ。千草の高姫ぢやあるまいかな」

照公 「ヘン、馬鹿を云ふない、千草の高姫が、こんな所へ泊るものか。彼奴は吃度何處かの王城へ忍び入り、又もや利帝利の後に化け込んでゐるやがるだらう」

梅公別 「ヤ、どうも怪しいぞ。一つ照公お前調べて見てくれんか」
女眞坊は小さい聲で

玄真坊「モシお三人さん、あの聲は千草の高姫に間違ひ御座いませぬ。私の畢丸を締めつけ、三万兩の金をほつたくつた大悪人で御座います。何卒彼奴をこつちめ、三万兩を取り返して下さい。さうすりや一万兩宛、お前さん等に進上致しまする」

梅公別「馬鹿を云ふな、吾々は金なんか必要はない。況して左守の館でほつたくつた金ぢやないか」

玄真坊「ハイ、お察しの通りで御座います」

梅公別「さうやら千草の高姫の相客は人間ぢやないらしいぞ。先生、之から私が正体を見届けて來ます。何卒暫く此處に待つて居て下さいや」

照國別「人さんの居間へ飛び込んで調べるご云ふ失禮な事はないぢやないか、そんな事せずとも自然に分つて來るよ」

斯く話す時しも二階の障子をサツと開けて放れ座敷を覗いたのは千草の高姫であつた。梅公の顔と高姫の顔はピッタリと合つた。千草の高姫は梅公の顔をバツと見るより、戀しいやら怖ろしいやら、顔を眞着にしてビリ／＼と慄ふた。妖幻坊の奎助は高姫の様子のみならず、不審を起し

奎助「オイ、高チャン、お前は様子が變ぢやないか、何オヂ／＼して居るのだ」

千草「奎助さん、あれ御覽なさいませ、三五教の照國別、照公、梅公別の三宣傳使が離棟の居間に泊つて居ます。そして玄真坊が横にゐますのを見れば、三万兩の金を取り返す爲に、息をふきかへして來たものと思はれます」

奎助「やアそりや大變だ、三五教の奴と聞けば俺もチツト虫が好かない、何さかしてお前と二人、此所を逃げ出さうぢやないか」

千草姫「奎助さん、貴方も氣の弱い事を仰有いますな、齋苑の館で彼奴等を家來抜ひを
して居つたちやありませんか。一つ貴方の大きな聲で、嗚鳴つて下されば照國別等
と云ふへば宣傳使は、一たまりもなく逃け出すぢやありませんか」

奎助「ウン、それもそうだが、今荒立て、は事が面倒になる。俺にも一つの考へがある
からのう」

千草姫「智謀絶倫と聞えた貴方の事ですから、滅多に如才はありますまい。それで何も
かも貴方にお任せ致して置きます」

奎助「ウン、今夜の處置は俺に任しておけ。俺に計略があるから、さア千草の高姫、此
方へおじや」

と云ひ乍ら二階の段梯子をトン／＼と下り、表へ出て番頭に小判を一枚握らせ

奎助「一寸月を賞して半時ばかり経てば歸つて来るから、表戸開けて置いてくれよ」

と、巧く誤魔化し高姫と共に濱邊に駆け出し、一艘の舟を盗んで一生懸命にハルの湖の
波を分けてスガの港へ向け漕いで行く。

照國別の一行は一夜を此所に明かし、あくる日の朝早くより一艘の船を眺へ、之亦ス
ガの港をさして進み行く事となつた。あ、惟神 靈幸倍坐世。

(大正一五・二・一 舊一四・二・一九 於月光閣 北村隆光録)

瑞 月

五十鈴川清き流れを汲みとりて

世を清めゆく三五の道

高皇産靈神皇産靈の大神の

よさしのまゝに道開くなり

敷島の大和心をふり起し

外國人も神國に救はん

|| 山河草木〔戊の巻〕一終 ||

昭和四年一月二十八日印刷
昭和四年二月一日發行

不 許
複 製

山河草木〔戊の巻〕奥附

定 價 金 壹 圓

京都府何鹿郡綾部町大字本宮村
小字本宮下三十二番地

編輯發行 兼印刷者 藤 津 進

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

發行所 天 聲 社

【振替大阪六〇五三四番】

終